

實說  
朝顔日記

264  
690

092766-000-1

特12-237

朝顔日記

聚栄堂

M44

DBQ-0048





實說朝  
顏  
日記

すがの家

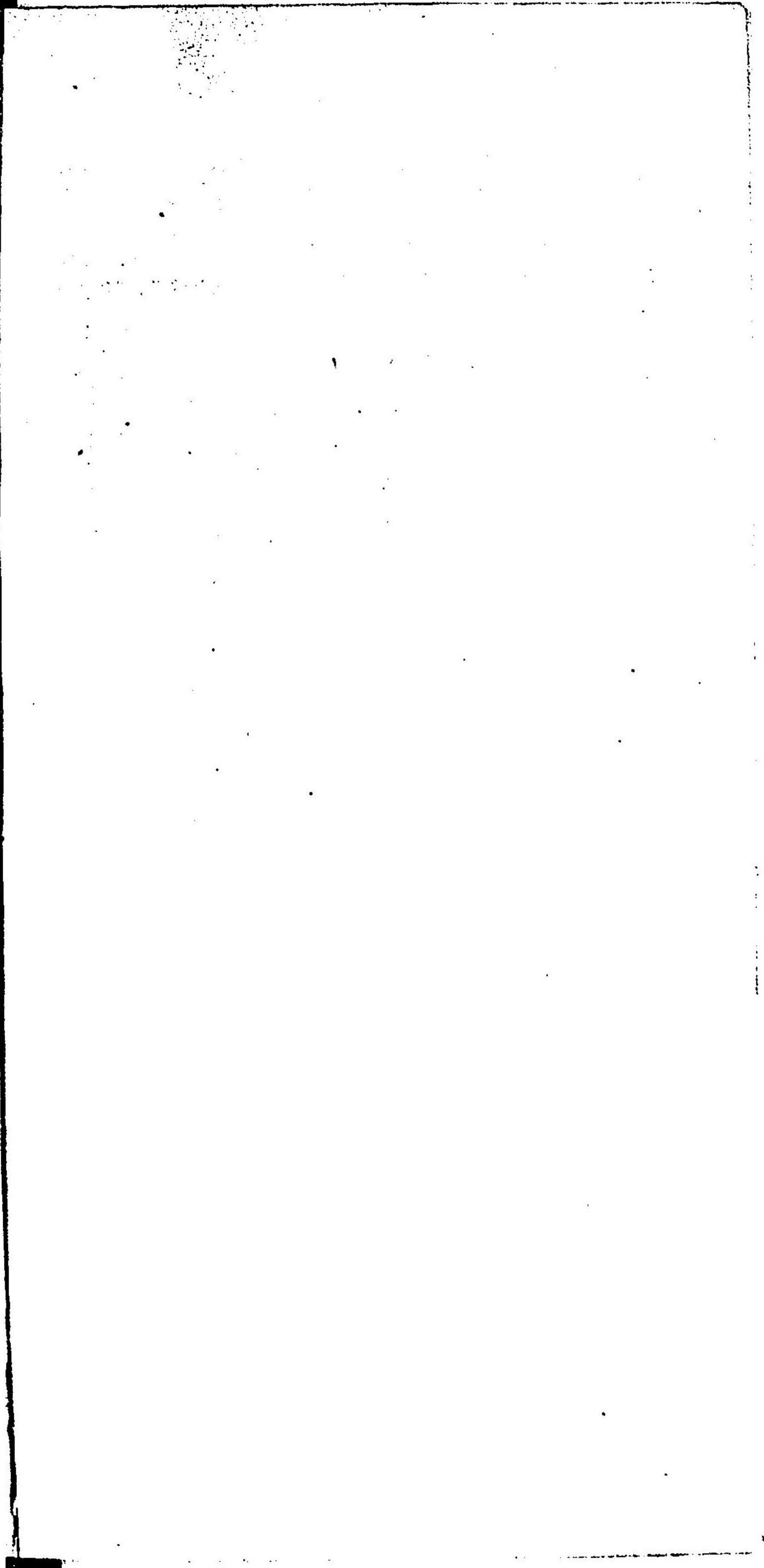
明治  
44. 2. 7  
内交

は し の き

朝顔日記は始め浪花の狂言作者司馬徳史の起筆なれど當時深雪の役と勘合  
且なかりければ其儘に打過にし遺稿と近松柳の首尾を増補し一部の歴史はな  
しにき之を歌舞伎に創めて演たるは二代目田之助晴山にて採に脚色して生寫朝  
顔話と題したるは文政十年山田宗山下と竹本重太夫の作なりと然して巻中  
の生なる駒澤次郎左衛門と稱するは其父照澤了海にて了海は通稱次郎八と云  
ひ藤山先生と證せらる筆に培ふ朝顔はの海のひの間の文章の體は恐れ入谷の  
轟駄家も三舎を違ふ手際といふべし

庚寅彌生上旬

菅の家主人記





(1) 記 日 願 初

人情  
裏談  
朝  
顔  
日記

第 一 回

「朝顔は朝な夕な咲かへて

盛久しき花にぞありける」

此隣に附ていと目出度物語在ける其初め肥後國に宮城廉助  
春彰といふ者あり代々國司菊地殿に仕へて四百石餘の知行  
を給はり數多の家來を扶持し男女の子實にさへ富て何不足  
なき暮なり此廉助至極篤實の生れなる上に博學の譽あるに  
依つて主君菊地殿の御心に協ひいち早く御見出ありて儒學

教授の職を司しめ給ふ夫より廉助は日毎に學校に行き歸つては一藩の子供に指南せり借此宮城の屋敷は菊地川の邊にあり此菊地川は巽の方の山より落あふ大川にて逆まく水は渦をなし猛獠蛟螭も住べしと覺えて物凄じき勢なり後ろは名たゝる阿蘇が嶽高く聳へて頂より火焰自然と燃上り黒烟たつて中天を焦し時ありては泥を降し岩を飛す驚熊鷹もこれが爲に怖れ犀狼も是を見ては隠れ伏す周圍の岩壁は恰も削たるが如く雲樹はいやが上に重なり其高さ幾千仞といふを知らず是を仰げば身の毛もよだつ斗の大峰なり薩摩の霧島豊前の英彦なんど世に聞えたれども阿蘇は鎮西第一の

名山にて靈異またいやちこなり先年征西將軍の宮良懐親王南帝の勅を受けて大明と好を結び給ひしより通門の使者往來絶す其頃明の永樂皇帝より彼山を封じて鎮國壽安の山とあがめ給ふとかや古き文に深山大澤龍蛇を産と記して名山大川の秀氣集り凝る時は極めて英雄豪傑を生ずる所と思はれたり爰に宮城廉助が妻若江と呼べるものは官司何某が妹にて婦人あがらも其の心雄々しく常に夫が經史を講ずるを聞いかにかに感ずる所やありけん一の大願を起しおくれたる望なれども天下國家を利益すべき一奇兒を授け給はれと阿蘇權現を願奉り朝な夕な垢離をかき東を望て伏拜み只管實をこ

らして祈ければ夫廉介五十を過その身四十の坂を登り斗ら  
ず只ならぬ身となりける流石は儒者の妻にしあれば胎教  
といふ事を守りていはた帯の月よりは益々身の行ひを慎み  
暇ある時は幼き者どもを膝元へ集へて忠孝の道を説聞せけ  
るかくて若江ははや産月を過せども産落すべき景色もあら  
ねば其身は更なり親族までも怪み且あやぶむ兎角して一月  
二月は夢の間に過行すでに十五ヶ月にぞなりにける若江は  
ほぞく鬼子をも孕みしかと安き心もなかりけるに其年の  
暮大晦日の夕刻に至り若江は不斗産の氣つきけるにぞあは  
てふためき取あけ婆よ安産薬よと騒ぎ暫く有て頻に惱みけ

るにぞ夫廉介は薬何くれと差圖し柱にもたれつと思はず打  
眠りぬ其時誰とはしらず山の神天下りますと叫ぶ聲に驚き  
見れば一朵の白雲に乗たる一員の金甲神出現まします其威  
權あたりを拂つて見えければ廉介驚きさつて席に頼つき  
畏みけるが忽ち襖のあなたより初聲高く揚たるが赤子に似  
合ぬ大音なり折から時計も鳴り響けば五更とおぼしく人々  
さしめきていと賑かなり覺えず頭を擧げて見廻せば山神は  
失給ひて初鳥家のうちにしばなくにぞつと起て障子開けば  
東の空はがらかと明方の氣色ばみやをら一輪嫩江登りて御  
嶽の頂を放れ一筋の白氣たなびき嶽の麓に速りて絶ざるは



不思議なりける有様なり此曉誰いふとなく宮城の屋敷より  
惟の白氣立のぼり折ふ赤子の泣聲聞しは只事ならずいか  
さま是は神の授け給ふ子の産れし故なるべしと此近邊の里  
人いひあへりしとぞ頓て年がましき乳母赤子を襁褓に包み  
抱き來り主廉介に見せければ厥介悦びて見れば産毛は艶々  
しくのび玉を欺く嬰兒なるが眼さやのはづれたるさまよも  
唯ものとは見えす殊に山神の靈異といひ後々は御用にも立  
べきものならんと末頼母しくぞ思ひける斯る悦びにめで  
彼御嶽にかたきりて幼名を阿蘇松と名づけこよなく寵愛し  
み育てけるに鸞鳳は卵のうちより聲衆鳥に優れ梅橙は二葉

より香氣諸木に勝の譬への如く阿蘇松はまだ乳放れのせぬ  
頃より一を聞いて万を知るの奇才ありて卓量衆に優れければ  
神童の聞え高くして十一才の時太守菊地殿より召出され初  
めて御目通りをなしける菊地左馬頭殿熟々は是を御覽じ給ふ  
に其容顔のあでやかなるさま露を含める花に優り玉に均し  
くあたりも輝くばかりなれば菊地殿近く召れ阿蘇松とは汝  
よな詩作なんどもなせるよし今此庭の趣きを即興に仕つれ  
と仰せける阿蘇松ひれふして上意を畏み聊か悪びれたる氣  
色もなく立所に五言の絶句を作り振袖打掛けて雪なく玉腕  
を廻らしつゝさらさらと書了りて是を捧ぐ其字体すべて韻

蛇の如く墨付いと匂やかなれば大守御威斜ならず當座に武  
百石の新地を下され紅梅組の列に加へさせ給ふ是より阿蘇  
松は直に御殿に止まりて影日向なく奉公をぞ圖みける此紅  
梅組といふ譯は菊地殿は深く儒道を重んせられ賢明類なく  
一個の良臣吉弘市正といふ者をあげ用ひて執事と成し給ふ  
吉弘は忠直の人にて寛政程よき政事に依りて領分治り國民都  
て大守の仁徳を仰ぎける此君常に風流を好ませたまひ御物  
好のあまり美麗すべれたる小性を撰み紅ひの美服を着せ御  
側まはり召仕はせ給ふ是を見る人其出たちの花美なるを  
褒め紅梅組と稱せしよりいつとなく紅梅と云習はせしとぞ

此組の頭取は荒尾虎橋とて當家の一老荒尾彌左衛門が次男  
なり父が權威あるに任日頃我意に誇り人もなげにぞ振舞け  
り去に新參の宮城阿蘇松が君の恩寵を蒙り類に出頭するを  
そねみ朋輩どもと常にあてこすり云ふて嘲弄せしかど阿蘇  
松は生れ得て大人しき生質なれば益々謙遜りていつも逆ら  
ふ事なければ彼いぢわるの仲間ども詮術なくてやみぬ此  
後三四年の間話しなして斯て後阿蘇松十五才荒尾虎橋十八才  
になりける春當屋敷の御先祖武徳院殿の御遠忌に當れり是  
によつて御菩提所水禪寺に於て三晝夜の大法會を設けられ  
祖君冥福のため水陸施餓鬼を修せしめられて其前後三日の

間領内殺生を禁じ又青變米などを施行ありて貧民を賑は  
しめ給ふ當日は三月十八日とぞ聞えける抑々是寧一山の開  
基にして代々唐より高僧渡來して住持せられ古延慶元年開  
山寧一和尚國守の招待に應じて下向あり當國第一の風水よ  
き地を見立一座のみつ林ふかき山元を伐り開き土木の工を  
盡して草創ありける大伽藍也宮殿樓閣立ついさ金壁輝き山  
門の額は皓月山の三大字にて南帝後龜山院の震輪なり後ろ  
の方の切岸よりは一筋の瀧水みなさきり落ち中程なる岩角に  
あたりて露を放てば恰も龍の玉を争ふかとおやまたる其渡  
り都て獨山吹咲亂れたり客殿の横はおはし間の砌まで彼

流れを引入れて大きな池をなせり澄きりたる水は鏡をの  
べたるが如く五直の垢を洗ふに堪たり是に影うつせば身の  
毛も數へつべし水泉の名空しからず清淨なる事云ふに堪た  
りかくて其日になりければ菊地左馬頭武頼朝臣參詣あり御  
供は大半惣門の下馬に残され御側の者共を供して大雄寶殿  
より上らせ給ふ御部屋雲井の方には腰もとにかしづかれ女中  
達は都て白装束をぞさせ給ひけるは大切なる御法の場な  
る故也とぞ此時佛殿階下に立ならびたる例の紅梅組の小性  
共と其間遠からねばかたは紅ぬかたは白一對に佳  
人美少年等の御供なれば人々我を忘れて譽てけり知客寮に

は布施香奠の類をならべ庫裏の方には米俵山の如く積置け  
り本堂の中央なる須彌壇には從四位拾遺補闕武徳院殿叙阿  
大禪門と書たる靈牌を設け七寶の臺には至青銅の瓶子に一  
枝の金花を挿めり香爐は伽羅を炷し銀燭青焰を吐き百味の  
山海陳異を盡したり住持遠惠の長老は恩賜の紫衣を着し孔  
雀の袈裟を斜に纏ひ數多の僧侶を率て珊瑚の珠數を摺りつ  
い恭しく靈牌に向て讀經の聲いと殊勝なり此時左右に立并  
びたる弟子たち種々の具を鳴して法樂をそらすにぞさしも  
に廣き殿上もひつそりと静まりて濟渡り天人も花を降すか  
と思はれ徐に憐を催しけり

第 二 回

優美を盡し御法會は時を遷して形の如く整ひ終りぬ此時鐘  
はるんくと響きて鼓は響々と鳴わたりけるにぞはや日中  
とぞ知れける菊地殿は知遠長老の誘ひにつきて書院の上段  
に座し熟々見渡し給へば客殿の作り様は更なり庭の砂子も  
玉を研きたらん様なるに池は鏡の如く長閑に霞渡りて又仄  
かなる稍さもの騒々しき頃なるにいと氣色ばみて横たはれ  
る櫻花の枝もたはむばかりに咲亂れ吹風にえならず匂ひ  
さうでいはん風情有て今や散も初めず咲も残らずいと奥床

しく見えにけり菊地殿一座を急度見渡し給ひ香爐峰の雪は  
 如何と仰せけるに御側近き群臣誰あつて御意を解する者な  
 く各々顔見合せ居たりけるに菊地殿にて不興氣にて御聲高  
 く香爐峰の雪はいかんと仰けるを遠侍に在ける御小性宮城  
 阿蘇松は上意を聞き姑く御前の様子伺ひしが人々矢張も  
 との如く黙然として一言の御答申上るものもなし阿蘇松は  
 いともどかしく思ひて其儘つと立て茶道風也をよび和主早  
 く御目障なるあの簾を高くと巻上らるべしと叫やきぬ風也  
 心得て其儘膝行おばしまへ至り凡其間三四間斗り簾を取除  
 けば忽地夜の明たるが如く晴やかになり咲亂れたる櫻の梢

をかぎりなごりなく見えて今一入の興を添させ給ふ菊地殿  
 初め簾を隔て御透見あらせられし程は何とやらん水月の御  
 心地にていと詠め憂く思しけるに今阿蘇松がいち早く心付  
 簾を巻せし其才智の賢しきを御感賞ありけり長老も思はず  
 如意を以て膝を打ち扱々宮城氏の子は希代の才人かなと頻  
 に賞賛して止ざれども猶座中には未だ其意を得ざるやうす  
 にぞ長老御前に向ひ君しろしめす如く唐の白樂天が高爐峰  
 の雪は簾を掲げて見るといふ絶唱あり天朝にては何れの天  
 子の御時にか雪のいと高く降けるはし殿に出御ありて今の  
 如く香爐峰の雪は如何と詔ありけるに玉座に侍さける公卿

達いまだ天意を得ずして暫したゆみ給ふ折しも官女清少納言のいはやく立て簾を掲上られし故事と符節を合せたる頃智なり夫は女流是は少人今むかしとはかはれども諸ともに其才妙なりと例しを引て譽ければ殿は益々御氣色麗はしく其儘阿蘇松を近く召されいみじくもでかしたりとの上意にて差添の御刀を御手づから賜りて渠が發明をぞ賞し給ふ是に依て阿蘇松は圖らず面目をほこしけるされば此事を聞傳へて御供先の内よりは兒性溜に來りて阿蘇松に逢ひ悦びを述る人も多かりける常に我意を振舞ひける荒尾虎橋をばじめ傍輩共は是が爲にたをされて各々色を失ひしはくと

していと手持無沙汰に黙してぞのみ居たりけり彼荒尾虎橋は素より腹あしき人にて日頃阿蘇松と睦しからぬうへ今しも不計上首尾を出かし拜領物せしなんどといと誇り顔なるあの面つきこそ胸悪けれとたまり兼て傍輩に向ひ先程君の御意に香爐峰の雪は如何と仰せしは禪家の問答といふものなるを阿蘇松ぬし誤り心得てみすを卷せられしはまぐれ當り也そを我君にも出かせりとして下され物は何事ぞ彼清女が簾を卷上しは雪にて詩の意にも協へり今日の御前は花なり樂天が詩にも香爐峰花とは云はず斯る間違にてしかせしは申さば鹿相といふものなり夫がもつけの幸となり不意に首

尾せしは察する所方丈には龍湯の下心ありし故迂濶に執な  
し申されしやつを悦ばせたる者なり惣じて刀を下さるゝは  
一番鎗か一番乗の時にこそ有べけれ但し外に思召もある事  
かさるを己が分際をも辨へず御辭退申べきも知らぬうつけ  
者何は兎もあれ雪と花とさへ分らぬ文盲の程片腹いたしと  
苦笑をなせば外の小性共も執嫉おもふ折柄にて口々にさみ  
なじるにぞ阿蘇松はいと打耻らひつゝはと汗あへる  
心地牛の角目だちて我上よりおこり天に均しき主君を悪ざ  
まに罵りけるはあらもつたいなしとづかゝと進出で虎橋  
殿の仰せ一を知て未だ其二を知らずと云ものなり如何とな

れば凡風流の道は詩にも歌にも雪を花になぞらへ花を雪に  
とりなしてこそ幽言なる風殊とも承はりつれ一々其例を引  
て言んには其數限り有べからず只其一二を舉んに去歲荆南  
梅雪に似たり今年荆木雪梅の如しさくら散る木の下風は寒  
からし空にしられぬ雪は降ける雪花を花とはあまり成唯俗  
言にていづくに面白みて味の侍るや如何くといひければ  
流石の虎橋も一句の下に言込られ覺えず赤めし其顔は猿の  
尻にさも似たり素より此座敷は奥まりたる所なれば斯口論  
に及ど雖も別間には知れざりけり荒尾虎橋は怒心頭よりお  
こり烈火の如く憤り如何にもしてさやつが落度を見顯し喧

嘩を仕掛したか打擲して此無念を晴さんと色々もくろみ  
立戻りけるが不斗阿蘇松が刀の置所法にはづれ差出たるを  
見て其所を行過るふりして阿蘇松が刀を足に任せて蹴散せ  
ばがらりとまるび来るに外の小性は又手を出してはね飛せ  
ば壁に當りてがたりと音す人々手を敲てとつと笑ふ阿蘇松  
はあはて是を取て押戴きは拜領の刀なり己等生置べきや  
と心に思へども態と面を和げ歯牙に懸べき体もなければ虎  
橋は増長して我今斯迄無禮をするに立あがりて敵對せぬは  
此虎橋が怖しいか何にもせよ大たわけの奴なりと飽まで辱  
しめけれども阿蘇松は雙の如く聊も取合ねば虎橋益々あな

とり己は腐れ儒者の悴なり何ぞ我に向ひ手むかひせん其生  
白けたるしやつらとは乗も合すと扇子逆手に持阿蘇松が  
眼へめて仰向にふつと唾を吐掛しは言語同断の狼藉なれ  
ども阿蘇松は愛ぞ一生懸命の時なれ御供先を騒し私に身を  
果さば屍のうへの恥を残さん兎にも角にも堪忍をするにし  
かすと胸の怒を押静め虎橋殿こは餘りなる雑言かな無禮も  
場所によるべし御供先なりあとは御遠慮あるべしと鼻紙を  
出して唾を拭ひしはいと大人しき振舞なり虎橋は呆れ實に  
能々の者なり己が卑怯を蔽はんとて事にかこつけ愈々見く  
びりやおれ阿蘇松御供先は和主に習はんや斯る殿堂にて是



程までには耻辱を受口惜とも思はず我無禮を咎ぬは沙汰の限  
りのべらぼうめ女の腐たるにも劣れり夫に何ぞや日頃汝が  
父の廉助は凡武士たるもの平常は文武に身を治め事あつては  
君の馬前にて大敵を打ちしき紛骨を盡んには武藝こそ肝要  
なれと常に劍法鎗術を修るよし聞と見るとは裏表今此忤が  
憶病を見れば廉助とてもたかの知れた木の葉武者敵を見る  
時は身を振ひ一番に逃走るは必定なり武士の風上にも置れ  
ぬ奴にて祿盗人とも云べしと出放題なる悪口にたまりかね  
阿蘇松は堪忍袋の緒をさらし先の方より御座近を憚り言せ  
て置ば附あがり無禮の段々武士の魂足に掛け刺へ人の面を

巷として恐れ多くも君をもさし父には種々の悪名をつけし  
條人面獸心の國賊めと思ふさまに罵り返し最早聞捨ては一  
分立す弓矢八幡ゆるすまじい尋常に勝負せよと飛ひさつ  
て身掃へせしがやよ待虎橋汝を今爰にて打果さば大切の御  
法事といひ清淨の道場に血を落さんば恐れあり互に死して  
も不忠の遺恨寧ろ明日盞井の松原にて潔く勝負を決し手並  
の程を見すべしと言ければ虎橋からと打笑ひ阿蘇松汝  
此場を言抜け今宵のうちに透電せんとの下心其手は喰ぬぞ  
實の武士の及の味一太刀うけて試よと刀すらりと抜放し躍  
上りて阿蘇松が真甲目がけてから竹割と切付たり既にあは

やと見えたるが阿蘇松飛鳥の如くに身を替し扇子を以て丁  
と打ば刀はばらりと落たりけり並居る小性原は虎橋に荷擔  
し阿蘇松を中に取込連て八方より打て懸る阿蘇松透さず  
落たる刀取る手も見せず虎橋が短刀にて打向ふを飛違へて  
虎橋を大袈裟に切放せば鮮血さつとほとばしりて紅梅の花  
を散せる如くなり此騒動に大方ならず其内人々集り來り矢  
庭に阿蘇松を引据血刀もぎとり屏風にて取巻殿重に警固を  
なし亂れ騒ぎける小性共を悉く在おさへけり菊地殿此由を  
聞き召て大に驚かせ給ひ其儘阿蘇松を目附役に預けられ事  
の次第を糺し給ふ殿には斯る珍事の出来しかば寝膳未だ央

第三回

ならざるに急がはしく供ぶれを傳へ歸駕をうながし給ひけ  
る  
明らかなる月は浮雲の爲に光を失ひ色めく花は狂風に香を  
空うす美玉は欠安く甘泉は盡やすし去程に勘密役の人々は  
荒尾虎橋宮城阿蘇松及傷の一件逐一に吟味を遂げ口書を  
せて家老吉弘市正に差出し猶詳かに事の様子を述て其裁判  
を待ける吉弘は俄かに裁許なし兼熟々と思ひ廻すに初め虎  
橋より仕掛たる喧嘩にて殊に種々の雑言を吐き刺さへ上の

事までも申せし條家老の嫡子に似氣なき振舞去と今其人死  
せし上は別に罪を問ふべき由もなく又阿蘇松は尤正事を得  
ずして討果せし譯なれば其罪輕きに似たれども同役を切害  
せし事明白なり併し古き式目に依て喧嘩兩成敗とし阿蘇松  
をば武法に任せて切腹せしめんには然あらば公なる沙汰な  
らん然なりと分別して次の朝出役し君に見えて申上げ  
るは去十八日御菩提所の御法事に於て荒尾虎橋宮城阿蘇松  
乃傷の義糺明仕り律例吟味仕り候處しかくの定法と均く  
候へば虎橋の死骸は其父彌平左衛門へ下され葬式を許し又  
阿蘇松義は古例の如く切腹仰付られて然るべく候はんかと

伺ひける左馬頭殿是を聞召れ忽御氣色變りて御眼尻いとす  
るどく見えさせ給ひ市正がいまだ言果ざるにつと立て奥深  
く走入給ふ市正此有様を見るより呆れ果しばし口を開かず  
是全く君の御心に叶はず阿蘇松を助け度思召ゆゑなりと推  
しける故元來忠直の人なれば我裁判の未熟なる事を知り且  
恥恐れ其儘御殿を罷出で我家へ歸てほとく寐食を安んせ  
ず様々案じ煩ひけるが何れ君の御内意を伺ひ見んと良久出  
仕をなせども取繼の用人どもいつも御不例くこのみ言つ  
ぎて御逢なし是に依て手續のものをして數多の帳面を繰ら  
せ其例やあると穿鑿すれども別に異儀もなければ市正益々

困し左さま右さま肝膽を惱ます齒をさへ傷る斗りなり此夜  
終夜眠られず獨り燈火を掲げて明るを待けるが不斗一手段  
を思ひ付たり夫は御部屋雲井の方は世に勝れたる恰例の性  
なれば是をたよりて内証より君の思召を伺ひ聞んと密に廣  
敷に手蔓を求めて其事を言込懇ろに頼ければ御部屋にも快  
くうけがい心を費し豫じめ設け置れし美酒佳肴は更なり吹  
彈の興をさへ設させ給ふ御機嫌うるはしき折柄過し頃小性  
共の事ありしが相手阿蘇松は如何なる御仕置に行せ給ひ  
しと何氣なくうちとひ給ふに殿聞召されれば未だ何とも  
家老ともより申出ずと斗り仰てまた餘のお話しに遷りてや

みぬ夫より君ならせ給ふ毎に雲井の方折に觸て此事を伺ひ  
給へばいつも同じお答へなりき或夜雲井の方君に向はせ給  
ひて妾不斗思ひ出せし事の侍る妾の里はしろしめす如く豊  
後の府内にて侍るが未だ幼なきときにて國司大友右近將監  
様の近習を勤めし高階源藏と云者の候ひしが丁度今度の如  
く互に意氣地の口論より此源藏は相手の一人を切殺し三人  
に疵付しを廻りの役人召捕て譯を委しく糺明せし處元來源  
藏は二ツなき忠臣にて私なく仕へける故彼佞人をも君の御  
前宜敷を妬み下城の道に待伏して不意討にせんとして却て  
彼が爲に討れしと云事明かなるにより國主の御裁判には彼

源藏に百兩の首代を出させ是を吊料として死せしもの、妻  
子に下され其餘の者共はお叱にて相濟侍りぬと物語りけれ  
ば菊地殿聞召のたまふやう其判断未だ宜きに協ふとはいふ  
べからず喧嘩両成敗と云事は古へよりの式法にあらずやと  
雲井の方膝を進めて左候は、其源藏へは切腹仰付らるゝか  
殿御頭を振せ給ひいや、御事の申さるゝ通りなれば其  
藏とやらん誠忠無二の者と忠臣を欺討にせんとせし悪黨等  
と同一に捌きなは主人は事に暗しと世に誘れ臣たる者は是を  
見て以來忠義は屬む者あらじ雲井の方御々怪しみ左あらば  
源藏を助けては御政道に協るにや殿然らず初めにも云ふ如

く助ては國法立難し予が思ふは其源藏とやらんを勘當して  
領内を拂ひ追放せしめ死者の名跡を立遣し荷擔の者等は屹  
度叱りて改むべし利解を加へすません斯せば大概寛仁の  
制度たるべし雲井の方御意を聞て陰に悦び又四方山の御語  
らひに成て其夜は分て帳内もしめやかなりしとぞ吉弘市正  
は雲井の方より御内意を傳聞悦ぶ事限りなし斯て市正翌日  
出仕し御目通を願ひければ早速御召出し有ける市正御部屋  
の内意を含みて宮城阿蘇松追放の事を伺ひ奉れば殿安々御  
聞濟有せられ然計らへとの御詮なる市正謹で其儘此由を役  
筋へ申渡しぬ市正は偏に雲井の方の御詮なりと添なく思ひ

又其發明を感じける其後菊地殿御部屋へ入せられ御機嫌能く雲井彼阿蘇松は永の暇を取せ追放せしぞ前の日御事が嘘咄よく出来たりと仰せられけるとぞ扱菊地殿如何なれば斯まで阿蘇松を助けたく思召てと其奥意を委しく尋ねれば是こそ深き子細あり是より以前菊地殿水禰寺の長老を招せられ密に仰られ近臣共の相を見せしめ給ふに長老一々見て言やう何れども骨法世の常に在り其中に宮城阿蘇松は希代の神相にて其生立頼母しく彼は王佐の才を具したる人傑にて後には世を救ひ天下の司法となるべき者なり去むも惜むべし一個の欠缺ありて十四五才の時不意に災あり一命も保ち

難からん此大難をだに免れなば彼が功名成就すべしと密に沙汰をぞせられける菊地殿然あらば如何して助けべし長老拂子を取直し天氣洩すべからずとぞ答へける菊地殿此時長老の言葉を覺え居給ひて年頃試し見給ふに近臣等が身の上の吉凶違はずして符節を合するが如くなり素より然あるべき筈は彼長老と云は震旦國楊子江なる金山寺にて修練せられし高僧にて風を見ること類なく人の禍福を指す事見通が如く是によつて菊地殿は此度の事起りし時彼が年丁度十五才なる故長老風鑑その験し有事神の如しと感給ひ世の利益益の爲を思召斯様して助けとらせ給ひしは依怙なき所明白

にて私に其徳果を貪り給ね証據は此計ひにて測知るべし未  
に至りて阿蘇松は駒澤何某と呼れ非常の功を立其名を海内  
に振ひし時菊地殿はじめて市正に斯と明させ給ひしとぞ先  
の夜雲井の方へ仰られし御言葉といみ類なき賢明の君なり  
彼虎豹の子は未だ文をなさすと雖もはや牛を喰ふの兆あり  
去ば目付役に召仕れ置れたる宮城阿蘇松は斯人を殺せし上  
は生延んとは思はねども大罪を犯せし身の私に死路を求る  
は上への恐れ早く御下知を待て罪に所せらるべしと疾より  
警を拂ひ最期の観念潔くぞ見えにけり斯る所に上使入來り  
て君の仰を傳へ追放仰付らる旨申渡せば直に追放の足輕

共九腰の阿蘇松を引立たり阿蘇松は思も寄らず辛き命を助  
かり御役所をぞ立出ける心なき行かひの人も此有様を見て  
哀を催しけり斯て阿蘇松は行事十町餘りにして官橋の上  
至り遙に御殿の薨を望で拜をなし君の大恩を謝し奉り正し  
く再生の父母なりと難有涙せきあへず此期に及びても父母  
にだに一目逢まく思へども叶はぬ事なれ實に武士の身の上  
程悲きものあらじと只女々しくも鼻うちかみ彼三閭太夫が  
澤邊に徘徊心地にて程なく菊地殿の城下を放れける東の町  
はづれなる一里塚を限れる例にや警固の足輕共は爰より阿  
蘇松を放ちて歸りぬ阿蘇松は屠所の羊のおもひをなし徐々

やと嶮しき萬籬折を登り凡塵より半腹までは微霧なく古木  
 立込て所々に山櫻うち交り花ははや過て名残り霞ゆる若葉  
 の梢あさ緑に深谷はとろと岩ふれ水鳴音激く石の鳥居  
 は幾個か越來つ常夜燈も流石に皓々たり頓て社に詣で廣前  
 の砂地に額づき禮拜してそこら徘徊しけるが列の詩のうか  
 み出る儘に腰に差たる矢立取出し短き筆に書付ぬ爰の大宮  
 司は續合なれば尋到るに卯の花の垣根に遊ぶ童の阿蘇松を  
 見知たるか一目見るより駈入て是を知すれば宮司忙はしく  
 出迎ひて座敷に請じ家内打寄り響應しける積る話に其夜は  
 更て漸く臥戸に入ば短夜の習ひ早くも山鳥の啼渡るに夢さ

とたどりつゝ頓て道の邊の行當りに近付と見れば右手なる  
 森の杉間より一筋の茶の烟立なびきていと物さびたる古き  
 社あり此内よりばらと立出て阿蘇松を引止め別れを惜  
 める輩は日頃親たる者にて先の程より集ひ居て首途を見送  
 るにぞ有ける去を骨肉の者共は上を憚りて來らざるなり阿  
 蘇松は人々に請れて茶店に腰打掛け別れの盃を酌かはす程  
 におくれればせに馳付たる從者が差出せる花布の風呂敷はど  
 き裕打着て旅装ひをなし差替を佩て目せき笠を左に持ちは  
 や別を告げて打立ば各々涙に袂を絞りける夫より阿蘇松は東  
 を差てたどりけるが御嶽は道の序といひ請願もあれば詣ば



へ結ばず朝まだきに起出て粥なご啜り終り旅装ひし暇を告  
て立出れば宮司が家族も立出て引留む阿蘇松は厚意忝な  
くはあなれども御勘當の身上なれば一夜と雖も御座近邊に  
長居せんは恐なきに非ずと固辭けるにぞ皆々も實に尤と思  
へば強ても止めず專と別れを惜みけり斯て阿蘇松は宮司が  
宿を立出て夜は既に明放れたれを木立深き奥山なればまだ  
ほの暗き雲の透間の星明りに透し見て路を下りてとある岩  
角に立て老木の隙より見下せば有明月の落かたに菊地の城  
と覺しく白壁の幽に見えけるに父母の在所は彼なるかと伏  
拜み是より先は山又た山にわけ入ば是ぞ我故郷の見納めな

れと徐に鵬を断つ思ひせり剩へ足元より山時鳥の啼たつに  
ぞいどい哀れを添て眼をしはたしき時鳥は歸るに如かずと  
なくものを我は罪あり追放の歸るよしなき身の上を悔み泣  
つゝ血の泪をぞ流しける夫より又八重に隔たる山河を越つ  
ゝ行けるに程なく豊後國鶴崎と云處に至れり此湊より便船  
に打乗道すがら障なく日ならずして周防の國松の浦にぞ若  
にける

第 四 回

大内家は琳聖大子以來連綿とつゞき繁榮類ひなく武威を振

ひけるが當主大内新助多々良満直殿御代に至りては既に數  
ヶ國を領し室町家の命に依りて西海道の探題となれど當家の  
儒臣に駒澤了庵と云者あり彼は肥後の藩中宮城廉助が弟な  
り廉助が八男阿蘇松が爲には現在の叔父なるに依りて阿蘇松  
は是をたより城下に來り頓て駒澤が屋敷に尋ね行き初めて  
對面なし其身の始末を明白に話して身の落付を頼ければ叔  
父了庵素より骨肉の事なれば一義にも及ばす快く肯ひて止  
め置けり此了庵先生と云るは山陽山陰の間に於て名たゝる  
儒者にて博學強氣にして經濟の度量又類なれば大内殿に  
も用ひられて政務の相談役を言付給ふ受業の門弟は日毎に

門に市をなす爰に集ひて學問を勵みける去程に宮城阿蘇松  
は此家にかゝり居て晝夜出精し書を讀で暫時も怠らず素よ  
り天賜の英智あれば螢雪の功つみて纔に五ヶ年が間に學問  
成就し今年十八歳になりける其如月の初め元服して宮城阿  
蘇次郎紀春雄と名乗りぬ斯男となるに付て青雲の思ひやる  
かたなくいさ一先京鎌倉へ赴き仕官せんと折を見て叔父了  
庵に向ひ遊學の爲都へ上りたき望あり當分の暇を給はるべ  
しと述べければ了庵首を振りて是を止め都はよろづ花廳にて  
少年輕薄のまじらひ好ざる所なり又こそ折もあらめと種々  
にすかし拵えて彼が望を拒みけるは深き所存のある故あり

了庵もど一子祥一といふものあれども放蕩にして父が戒を  
用ひざれば遂に勘當に及びしが外に子とてはあらざればい  
と便なく思ひし折柄不圖阿蘇次郎が尋來りしに其さかしき  
才あるを愛し是を養子となし我家督を繼せんと思ひ立彼が  
振舞を見るに其志望の大なるを推せし故今なまじひに手放  
さば再び歸り來るまじと思ひて引止めたるなり事にさとき  
阿蘇次郎早く此景色を見て取り我はじめ國を出し日より御  
直參ならでは仕へまじと志をたてしものなり駒澤家五百石  
の知行を望む所にあらずと一通の書置を残し其夜間にまぎ  
れて了庵が家を忍び出ゆさく惱ぬあしびきの山口の方も

遙の跡に見なしつゝたどりくと日を重ね漸く難波の都に  
至り聞及べる住吉天王寺なんどあらかた拜み回り夫より北  
を差して長柄川を打渡り山さきの海道を経て西嵯峨に入り名  
所古跡を探りつゝ名たゝる嵐山の麓に來て見れば峰々の形  
は彩色の金屏をつらねしかと疑はれ下行水は瑠璃をなして  
美事なり此方彼方に霞あひたる梢どもは錦を引波せる如く  
數限りなき櫻のはや十二分に咲亂れて山も堆もれたる斗り  
頃しも彌生の十日あまりなれば空の麗かなる人の心も延や  
うにて物思はしき折なる故川添の氣色鳥の聲も心地よげな  
り此時人々雲の如く出さかり所せましと打集ひ所々に慕引

廻し唄ひつ舞ひつおのが隨意遊び戯ふれる中にやんこと  
なき御方の御遊にやたなしし舟楫さしせて絲竹をしらべ給  
へる其聲妙に遙渡りて幽雅なる事いふ斗りなし  
舟うけて誰もの音に遊ぶらん

嵐の山の花の木隠れ

と三扁打吟じける其時誰とは知らず後より袖をとらへて今  
吟せられしは足下の詠まれたる和歌なるやといふに阿蘇次  
郎つと振向て是を見れば頭に唐帽巾を頂き身に黒染の衣を  
着たる殊勝氣なる禪僧と見るにも恭しく腰を屈めて如何に  
も某が詠みたるなり彼禪僧打點頭づき足下の大姓高名はい

かん阿蘇次郎答へてそれがしは宮城阿蘇次郎春雄といへる  
浪人なり僧これを聞いてこは能き人を得たり拙僧は月心とて  
東福寺會下の者我も常に此道をたしなみ侍るいざ下に居た  
まへ暫時物語り候はんぞひらみたる岩の塵打拂ひて二人差  
向ひにて互に風流の咄しをなすに其好める事替らで甚だ其  
趣きをなしければ阿蘇次郎も一智を得たりと悦びける月心  
いへらく拙僧も此嵯峨の花見んと昨日東山より來り遊びて  
夕邊は陰川寺に宿れり契り置たる事もあれば今より船舟院  
にまかりて宿り諸共に夜櫻を賞さんはいか足下同意あり  
なば卒伴はんと勸れば宮城いふ様今日は如何なる因縁とや

貴僧に御目に懸り剩さへ同宿へ誘ひ給ふこそ望の外の悦びなり素り急ぐ旅にもあらずいかさま今宵は月もあれば夜更  
て人静まるに乘じ貴僧と手を携へて月夜の花を見直し侍ら  
ん施は道連世はなさけさらは御供申べしと打連立てぞ行に  
ける其夜阿蘇次郎が月心和尚に示したる句詩とて世に残れ  
るあり次の日宮城阿蘇次郎は月心と連立出しが空もどんを  
りと霞み閉て雨催ひなり月心はまた此わたりに訪ふ人のあ  
りとて懇ろに再會を契りてぞ立別ぬ阿蘇次郎もはとく一  
夕の奇遇を感じ深く其厚志を謝して止まざりけり借も阿蘇  
次郎は不意の旅立にて路金とても用意せざれば爰まで來る

に大方遣ひ果しつされども大丈夫なれば是等の瓊々たる事  
は物の數ともせざりけり夫より又北野の天満宮に詣で茶店  
の床机に息らひてやをら茶代を償はんと腰なる財布を探り  
見ればいつか売にて銭さへあらねば今宵の旅籠はさらなり  
差當ると見れば向ふの繪馬堂に打仰ぎて立居たる男の髪は  
鬢際よりたばねるばかり切殘してうしざまにそらせしは恰  
も慈姑の形めき羊羹色なる一ツ小袖うち着て偽入丈の長羽  
織を引掛け短き合口を貫抜きにしたるは所謂繪馬醫者の  
類ならんと微笑せしが彼が此方へ振向たる面付の何とやら  
ん近付のやうなれば世には似たる人も有ものかなと瞳を定

めて見るうちには彼方も又阿蘇次郎を見て目を放さずしばし  
イみ打守りぬ此醫者は立花鶏庵として一條辰橋の邊に住ひる  
るものなりしが是よりさきちどの好むを便りて周防の山口に  
下り國守大内殿の醫者萩野祐庵が弟子となり爰に玄關番を  
勤め居しうち鶏庵素より放蕩者なればいつか祐庵が忤祐仙  
を唆かし折々は花見に准て連出し杯しつ祐仙をして父祐庵  
の金子二十兩を盗出させ是を借受其夜山口を逐電して京都  
へ歸れり鶏庵山口に在りし頃駒澤の門に入り其講釋を聞に  
行し故阿蘇次郎とも近付になり借も鶏庵は阿蘇次郎を見認  
し故近付寄て頻に禮をなし一別以來疎遠の情を述べ又其上

京の故を問ふ阿蘇次郎某事俄の旅立にて囊中乏しく斯憚  
しくして此近傍に徘徊ぬるよし打あけ今は如何とも詮術な  
し如何して宜んと相談するに鶏庵笑面を造り夫は嘸お困り  
ならんさあらば先我等方へ來り給へ何時迄もかくまひ申さ  
んど懇懇に誘ひけるにぞ阿蘇次郎深く悦び厚く謝禮す此時  
俄に空かき曇り雨降り出し二人は周章軒傳ひに鶏庵が家に  
たむり着ぬ鶏庵何とて斯く容易かくまひしぞとなれば彼も  
と阿蘇次郎の萬藝に達せし事を知り居る故是を因に利を取  
らんと巧なり夫より阿蘇次郎は鶏庵が借宅にありて彼が  
勤に任せ書の講釋を始めけるに京中の諸人阿蘇次郎が博識

を聞傳へて我もくくと集ひ来て其門に入るもの夥しく謝儀  
また多く收りけるにぞ鶏庵は舌打して獨り笑みし其謝禮も  
大方は掠取りて十分に事を得たりと最誇り顔なり一度阿蘇  
次郎に出會し其議論を聞もの感服せざるはなく各々其大才  
を賞していと評判高かりければ後にはよしある人さへ門  
下に來りて遊ぶに鶏庵は獨り利を貧り先生には祿々捕はず  
新しき衣類をも着せざる様子なれば高弟共是を察し大に不  
足の色をなし陰に相談し下河原に一座の明座敷を借受け一  
切の諸道具を取揃へ阿蘇次郎に勧めて是に移したまた一人篇  
實なる老僕を抱へて飯焚とす然ば爰ぞ阿蘇次郎が住宅なれ

ば門人は益々多く衣食に事は關すなりしと

第五回

光陰矢の如く宮城阿蘇次郎ははや二十一才にぞなりにけり  
今年は如何なる順氣にや卯月の初めよりして宇治瀬田のあ  
たり笠の出る事夥しく夕暮杯には目口へ遣入斗りにて十や  
二十は一拍にもとらるゝ杯と云のゝしるに浮れ安きは都の  
人の常なれば京難波の人は是を見んと酒肴を調へて館舟は  
さらなり宇治橋のわたりは所せきまで差寄りて笠狩をぞ競  
ひける或日下河原の座しきにても宮城が内弟子蘆守忠吾伴

野筑八の二人は兼て謀し合せし事にや阿蘇次郎に向ひ先生にも聞き召るゝ通り今年は宇治川の螢多く出て其光も格別なるよし先生も朝夕御指南のみにて暮し給へば御精も盡き申すべし一日の閑を倫み御出あらばよき御氣晴しならん我々も御供申さんと懇に勸めければ至極温順なる阿蘇次郎彼等が好意に従へば二人の者の大に悦び速に瓢へ酒をつめ行厨の用意なと充分にして阿蘇次郎を先に立壯年の書生伴野筑八蘆守忠吾を伴ひ鳥明より都門を出で伏見にいたり豊後橋を渡り小倉つゞきを傳ひ行此わたり風景最佳なれば阿蘇次郎はいと興に入り心長閉に古詩なを吟じて歩行ゆくに

程もなく宇治の境にいたりて黄蘗山なる萬福寺の山門に入れば堂塔都て唐めきて珍らし夫より王聖寺平等院なんを見廻り扇の芝の故跡を尋ねまた名たたる通圓が茶店に立寄り茶を呑み湯を羨ぎまたしも宇治橋をわたり橋姫の祠の邊に才み經が島龜か石を探り彼佐々木高綱が乗出したる橋の小島が崎は何れぞ捲の島はあれなるかと行つ戻りつたせりつ川を渡せば此時未の刻なれどもはや益狩の催しと覺しく種々の遊船共追々差登り來て橋の上下は所せまきまで打集ひて賑はしき事いふばかりなく是後の世の天満祭にさも似たり阿蘇次郎は二人の門弟と俱に橋の欄干に寄り



てそこら打詠め心を慰め居たりしが少し隔てし川上なる柳  
原の茂くたち込たるが時しも緑の蔭を含みていと静けき處  
なるに一艘の家根舟を繋がせて主は誰ともしらぬ火の筑紫  
琴をしらべけるなまめいたる聲音は加凌頻伽をも思ひやら  
れ其爪音いと妙にして面白き事いふばかりなし阿蘇次郎眉  
を繋めこはあやしやあの舟にて彈曲はしらぬ火といふ唱歌  
なり筑前の國主太宰相小貳殿の秘曲なるゆゑ西國にすら彈  
人稀なりあの末に十八段の波かへしとて秘すものありと云  
ければ忠吾筑八は今に初めぬ師の博識音律にさへくわしき  
事を感じしける此時また川の面にも此琴の音を聞んとにや敷

多の舟をもとぎよせて琴彈く舟を取巻ける筑八言やうあの  
彈人はとせならんかほどのよき聲は都にても容易く聞得べ  
からず難波女かも知れずといふ阿蘇次郎いへらくいやく  
爪音を考るに陰聲なり女の聲は陽なるものぞされどまた盲  
目はきはめて陰なるものなり此聲はしからずたしかに女の  
聲なれども陰中に陽を含めば矢張兩眼明かなる乙女なるべ  
し歌ひ方の床しさいいで近付寄て聞まはしと二人の者を諸  
俱に橋詰なる漁師を頼みて一艘の舟を借受け打乗りて彼の  
柳蔭の館船のあたりへさしやらしむ船頭早くも差寄せて彼  
舟の側にとぎよせ舟を川中に繋ぎ己は其儘船端を枕にして

臥しぬ阿蘇次郎等は割籠さへへ杯取出し冷けき酒うち香て  
興を扶け彼かへしの曲を聞に頓て爪音も止みければ集へる  
船共はおのが儘に散行き稍遠かるにつきて跡はひつそり静  
まる折柄彼船の障子開けて内の様あらはに見ゆ紫紋の袴の  
うへに柿地の小鶴雲鳳の帯をべて坐したるが其膝邊に齡十  
六七と覺しき娘有て金糸のひた縫したる緋縮緬の装ひにて  
黒天鷲絨の帯を纏ひ同じ年頃の腰元三人斗付居たり其側に  
は一族の奥方めきたる女もほのみゆる琴は娘の前に横たわ  
りあるにぞ今彈せし主とは知れぬ人々は香爐をまはしつゝ  
名香を聞居たる跡いと高尙なりされば俄に物音の静まりし

もむべなり斯る所に不意の風吹起つて船だなに有たる輕き  
ものは何れも吹散したるに彼の娘の帽子をも吹まくりて暴  
を巻上げ雲井遙に飛行けるしばしあつてこの仇風のなきけ  
れば先に巻上げたるものども落る中に帽子は輕きものな  
ればひらりくと翻り來る其様きぬ色の濃き紫なるが夕日  
輝きあひて怡もあやある鳳凰なんどの舞遊ふかとあやまた  
れつ腰元ども舟端へ出ておれよくともがげども其甲斐な  
しかなたこなたの舟よりも是を見てこは希代の見ものかな  
と罵りさわぐ其内に次第く舞下りて阿蘇次郎が舟邊に  
落なんとするさまなれば萬に氣轉の阿蘇次郎幸ひ艦の方に

古へ宇治に遊びたる薫の君も斯やと思ふ斗りなるに霎時見  
 惚てゐたりしが頼て出来り阿蘇次郎に向ひ手をつき禮義正  
 ししく言やう我方の主の申さるゝは先程娘が失ひたる帽子を  
 恵み給はりしは悦び侍るなり見へ侍りて禮をも速たく思ひ  
 候へば設けの筒へもいとすさびて侍れば九献まゐらせなん  
 に渡らせ給へと請じける阿蘇次郎答て先は帽子御手に入て  
 悦ばしく又お船に召れ御酒給はる條懇ろなる仰せ最忝なく  
 思ひ侍れとお船には女中のみおはせなるに冠者として近付  
 侍らんは世の憚りなきにあらす無禮ながらも辭み申なりと  
 迷けれども聞入す種々言葉を盡して誘ひける忠吾筑八は先

居合せたるにぞ自ら艫を採り一ツこじると見えしが程よき  
 所にて阿蘇次郎左の手は後ろさまに艫をもち右の手を出し  
 て腰なる扇扱とりかの帽子を水際二尺ばかりにてこれを引  
 掛とり得たり見る人一同に譽さはぐ聲しばしは鳴も止ざり  
 けり此時阿蘇次郎思はず持たる艫を放せば我舟隣の舟に當  
 りべたりとついたる様にて放す折よく腰元どもは船縁にあ  
 りし故阿蘇次郎は其儘彼帽子を扇に乗せて差出しはおぬ  
 し達の帽子には侍らずやとて渡しければ腰元の淺香ニハ忝  
 なしと喜びをのべ彼帽子を採り扇を返すとて熟々と阿蘇次  
 郎を見るに色白くして眉秀で威あつて優しき好男子の風は

つ方より彼美人の群に見惚ていと好ましく思ひはさく  
ひ居たりしが是幸ひと腰元とも諸共に是非とも先生お出あ  
れと勸れば腰元どもは先人質のそなへにて忠吾筑八を早く  
もおのが船へ誘ひ行き猶強て阿蘇次郎が袖にすがり只管口  
説にぞ謹み深き阿蘇次郎も今は懐とくもてあましぬ此時  
一個の侍女出たりニハ物堅き石邊金吉様よ斯る風流の  
遊に何かは苦しかるべきいざと云つゝ手を探りて引入るゝ  
にぞ腰元共は更なり忠吾筑八までも是を扶け袖を引腰を押  
なぞして漸く船の中に引入れける阿蘇次郎其時彼船の  
真中に座を占め主顔なる女房に禮をなして其厚意を謝しま

た坐なみに挨拶を述べける彼女房は少し盛は過たれども水  
々しき其様咲遅れたる牡丹の如く猶しも匂ひを失はず夫が  
娘と覺しきは世に勝れたる器量にてまさしく沈魚落雁の形  
ち閉月羞花の粧ひあり彼娘ひそかに忍び目通すに阿蘇次郎  
も思はずじつと見換しければ娘は莞爾り笑を作り袖かきお  
はふ有様は天津乙女の天降りて遊ぶにや或は又龍宮の姫が  
海底より出て慰むがと覺ゆ筑八忠吾は是を見てはとくう  
つつをぬかし物いふ事さへ霎時そぞろなり彼女房は帽子の  
禮を述べ終り見給ふ如く妾が船は殿達とてもなく最興なき  
に能を渡らせ給ひしと盃取上て在所酒の酔に足らず花の趣

きをなさずと申せども一樹の蔭一河の流れも他生の縁とは  
 申さずやうらなく思召てよと阿蘇次郎に献ければユハ圖ら  
 ざる御饗應に逢侍ると深く悦びければも猶初々しき對面な  
 れば互に打解る氣はひもなけれど爰に出會ふ才子佳人は錦  
 の上に花を添る寔に一雙の美玉の如しと見る者ごとに羨み  
 けり

第六回

阿蘇次郎は何氣なく側なる扇子を取りて三四分押開き一座  
 に免させ給へと會釋をなし胸の邊を打あふぎやをら置んと

して思はず残りなく開き見れば一首の歌を書たるが筆のそ

さびの常ならぬと覺ゆ

梅が香をこむる霞の絶間より

綴れて匂ふ鶯のこゑ

阿蘇次郎は見知りたる忠吾が扇子なるにぞ彼が方に向ひ是  
 は足下の持給るし扇子なるに歌のさまのやさしき墨付の麗  
 しき事いふばかりなし何人の書れしにや其人床しと問けれ  
 ば筑八そは婦人の詠歌なりとてさる方より得侍りき然あれ  
 ば其人を誰といふ事を知らずといふ阿蘇次郎眉を顰めさも  
 あらば加茂の祐包かさらずは誰ならん今世都にて是程の歌

よむ人は聞も及ばずと深く感じける侍女はほとく笑ひ入  
て餘にまじめのお顔ばせかな夫こそ我方の主の詠たる歌な  
りといへば彼女房は侍女を叱りさな申しそ最と耻かしきに  
といふ阿蘇次郎襟元を搔繕ひ扱々抽たる趣きありけるよと  
感に堪てぞゐたりける彼女房はいと耻らふさまに款侍さも  
先つ方より琴といひ香といひ殊に今の和歌なごの風流たる  
けはひの趣き有にぞ是が爲にみたり男子は其儘に押れて  
興は婦人の方に奪れ各々てれたる有様なり負ぬ氣なる伴野  
筑八耐へ兼て己が扇子の要の方を向ふさまになし彼女房の  
前に差出し此扇面は是なる我師の詠歌なりと見せびらかし

ぬ阿蘇次郎是を見て手に汗を握りけるに女房は早くも彼の  
扇子を戴き開き見れば  
世の人の月は詠めしかたみぞと  
思へばく濡るゝ袖かな  
と走り書なる墨付の美しさはさながら飛花落葉の如くなり  
是は情深きお歌にて近頃の秀逸とこそ思ひ侍ると彌人柄を  
も慕へるさまして稱しける阿蘇次郎は又しも先の歌を譽て  
篤き言葉に酬ひ重ねて言やう先程彈給へこ琴はたしかに筑  
紫なる松浦檢校が手を付たるしらぬ火といふ調にて筑前守  
殿の秘曲なりしと承はりきお聲もいと若やかにいみじう候

然ばいかなる御女中にましくけるやらん聞まほし包ます  
明させ給へかしと問ければ女房打聞てコハお尋にあひて耻  
かはしくこそ候へ我々は人に甲斐なき者の族なりなせう明  
白に告参らすべき又ぞ折こそ候はめ左のたまふ殿こそよし  
あり氣なる御氣はひとく名乗らせ給へといふ阿蘇次郎  
答へて某は西國の浪人なりもとこれ下郎のうへなればいか  
でおこがましくも名乗候うべき左はあれ我性として律の調  
子を好み侍るが今の御爪音の面白忘れやらす聞ならく太  
宰の家には菊のしほりといふ秘曲も侍るよし不知火を弾せ  
給ふうへはよも菊のしほりを知しめさぬ事は有まじ今日は

不思議の幸ありて古郷の音を承り一入興深く覺え侍りか  
しこけれと能き序にしあれば菊の枝折をも聞せ給へと望み  
ける彼女房點頭てコハ委しくも知し召れぬ其唄は娘も能く  
覺侍りやよ深雪かばかり懇切に仰するに疾く調べてお耳を  
穢しまゐらせよといふ娘は只忍び目して只管阿蘇次郎に見  
惚て居たりしが是と聞より顔打あかめ心ときめき胸打騒ぎ  
て免させ給へといふ言葉さへ口籠りていと耻かしげなり然  
さも猶母も勸めて止まず此時深雪は何かは知らず腰元淺香  
に密話しが淺香は阿蘇次郎が膝邊に居寄り最薄らかなる扇  
子を差置き是に物書て給はり候へ我方の御兩人の乞せ給ふ

にといふ阿蘇次郎の扇を採上ればいかにも媛の扇子と覺  
しく玉手に觸し移り香の身にしむ斗り物床しく裏表打返し  
て見るにまばゆき銀地風も薫り見ゆるにぞいかにも仰に任  
せなん其料には兎まれ角まれ菊の枝折を弾じ給へと望みけ  
る娘はやをら袖搔あふて猶耻らへば乳母と眞柴は阿蘇次郎  
に向ひて我姫はまだ初々しき部屋でもりにあればなせう殿  
達の前にして容易に調べ給ふべき先方殿の譽給へる梅が香  
の唄は主が近頃手を付られし調子なり菊の枝折と同じ事惜  
ますも其扇の書替をなし給ひさあらばかへ事にして主にも  
秘曲を彈て償ひ給へと彼方此方を勘むれば母刀自も是を背

ひやをら調子を律に調べかへて最も優しき玉琴を撥鳴しつ  
ふ事の切なりければ今は固辭に由なくて墨書の一輪朝顔を  
書き其上に  
露のひぬまの朝顔を照らす日影のつれなさよ  
あはれひと村雨のはらくとふれかし  
とさらくと書下せり折柄梅が香の曲も果ければ娘は更な  
り女中達翠つて此扇を見るに歌は催馬樂とやらんの調にて  
字体美きは草葉わけにさゝれゆく其水くきのよとみいと  
つゆけくぞ見えにける斯る事に打興じて阿蘇次郎も覺えず



數盃を傾け微醉機嫌に人々に向ひて今日は斗らずも折る  
應にあづかり何報ふべき由もなければ今その扇子の畫賛に  
手をつけ拙き音を聞え上げ少しの興をも添なんと側に有  
合ふ三味線搔抱き霎時調子を合せつゝ今阿蘇次郎が席上に  
て作りし露のひぬまの朝顔の唄に手をつき一二遍うちかへ  
して彈唄ふ其聲妙に哀れなり聞人耳をそばだて感に堪へず  
徐に涙をさへこぼしつまたしもばらくとふれかし坏唄ふ  
とき天も感應ましけん眞の村雨ばらくと打そぼち水  
の上舟の家根にも音なふにぞ此うき人の肌にしめいと涼  
しく心地よげなり此時左右の障子開けばはや黄昏にて川面

は數限りなき螢火の噂にいやましければ阿蘇次郎急度心付  
き日も暮果て婦人ばかりの此席に長居せんもうしろめたし  
と早くも衣紋をかいた種々の馳走を謝し二人の弟子を急  
して我舟に乗移れば人々残り惜みける別て娘は戀人と  
今日半日のまといしてはや十年も名染し心地せられ今別れ  
ては又いつの逢瀬やあらんと彼船を見送りて残る恨みのや  
る方なくおもかけ染て忘れ兼ね涙に昏て居たりける阿蘇次  
郎は數多の船をこぎ抜行にいづれもはや興盡たれば先の橋  
詰より上り頓て旅籠屋を尋ね三人爰に宿りを求めぬ此わた  
りも都て柳原にて戦げる木末のものと赤やかになりしばらく

ありて東の山の端より月さし登りその影大河に映じこがねの波はさしれ立山の色をうつして黛をなし清風吹渡り白露は江に横ありて涼しき事限りなく忘れては秋の空かと思ふばかり数千の螢火も月の爲に光を奪はれ風景の目ざましく有けるにぞ只管詠入りてぞゐたりしが隣りの垣つづりにも女の聲姦ましく筑八差覗きしに此方を見入たる女の顔月の光に透し見れば紛ふ方なき先の腰元なれば筑八笑して是は又爰にても不思議に邂逅はべるといふ腰元淺香は是を聞先客にておはしき師の殿にも宜しく申され給へ斯る事にあらば一ツ家に宿らんものと云つゝ入しが頓て又出来たりて

欄干に攀て此方の内をのぞき皆様是にいませり明なば我方の人々は石山へ詣ずるなり殿達にも伴ひ給はんやといふ忠吾筑八わたり船と欣びて明日の約束をぞなしにける斯て各臥戸に入りぬ阿蘇次郎は未だ夜の深さに起出二人の弟子を動起せば二人は目を醒しはや隣より誘ひ来しやと問にぞ阿蘇次郎いふ左に非ず急ぎ都へ歸らんと急立れば二人は是を聞て大に不興氣にて尋に約せし事もあれば南河の美人達と打連て石山へ行ば昨日に優りて面白かるべし先生も今日日枉て我等と遊ばせ給へと只管勸むれども阿蘇次郎は頭を振て窮士は寸陰を惜むべしと戒めれば忠吾筑八は詮術なく

大に望を失ひてしぶく師匠の跡につき都へ歸ぬ宮城阿蘇  
次郎が宇治の川船に達たる女房達の素性を尋ねれば筑紫な  
る太宰少貳殿の浪人秋月弓之助が家内なり弓之助が妻を水  
青といひ娘を深雪と云り彼弓之助國を立退き些の由緒を頼  
みて都に上り岡崎村に隠れ住みぬ弓之助は生れ得て其形容  
勇々敷文武の才を兼ね剩さへ精兵の譽れ世に高し本國筑前  
に在りゑ時は太宰家に使へて二千八百石の知行を採り番頭  
を勤しとぞ素より大祿を領せし身なれば今斯浪々の身と成  
ても至極内福なる暮しにて數多の家來を使ける昨日は雑色  
なる一族の内室をも誘ひて宇治の笠見に出たりさて此弓之

助が浪人したる譯といふは是より先太宰家足輕に足柄傳藏  
といふ者あり渠が妹におらんとて生れ付可成の奇量なりし  
が同じ家中の馬廻り山十郎と密通せり其家原貧しければ山  
十郎折に觸ては志しを遣しみつぎけるとかや

第 七 回

されば足柄傳藏は素これ善からぬ者なれば己が利を貪りて  
お蘭が山十郎と通せし事は知らぬ顔にて打過ける斯ておら  
んはまだしも小野右近といふ者とも深く云替せしかば是を  
妻にせんはつりあはぬ縁なれば取親を排らへ味く傳藏とも

測りて迎へとらんと其設をぞ急ぎける山十郎其催しを聞さ  
ひとしく大に怒り傳藏を責てお蘭は是非に我方へ申受すは  
武士道立難しと散々に罵るに右近はまた約束せし事なれば  
右まれ左まれお蘭は我妻なりと双方ます言募りてさら  
ば鎗先にて取て見せんと共に意氣地を立抜くにぞ親しき傍  
輩どもは三四十人ツと互に荷擔し相手を打果してお蘭を  
奪ひ立退んと夜晝両家へ打集ひいまや切て出んとひしめき  
ける老人なごは中に入り扱ひ見れども聞入れず大騒動に及  
ばんとす其頃筑前の國司龍壽丸君未だ幼少に在しける故賢  
女の聞えある後室紫光彈尼簾を垂て政事を聽せられしが此

度の騒動を深く驚かせ給ひ物になれ甲斐くしき者なれば  
とて急ぎ秋月弓之助を呼出され今度の騒ぎ汝の組下のもの  
多し早く其場に行き無事に取静めよとの上意なり弓之助長  
まりて直に馬を飛せ馳行ける此時ははや双方白刃を打振  
り既に戦に及んとすれば弓之助馬を真中に乗付け後室より  
預り來りし御家の小旗を抜取つて前後左右をさへ上意く  
と呼はりける是を見てさしもに亂れ騒ぎける徒黨の者共東  
西に別れて各々地にひざまづき弓之助馬上より大音揚げ御  
幼君と悔り譜代恩願の身として上の御爲を顧みず私の意恨  
に依て一命を果さんとは重々の不忠なり急度先非を改むべ

しが一陣の時雨を凌がんと僅に有あふ三四人の近習を従へ  
御手に鷹を据へさせられてとある庵室に入せ給ふて閉さぬ  
内には圍爐裏の茶こぼれて主はいづこえか行けん見えざり  
けり少武殿主従は竹椽に腰打掛け休らひ給ふ折柄雨り止た  
り唯手なる山本より袖笠して來れるはいとうら若き尼なれ  
ば御佛へ供へんとにや寒菊山茶花折入れたる闕伽桶を手に  
携げたり尼不斗見るに我庵にの給ふ御方はさも氣高き御出  
たちなり正しく國主よと推せしかば垣根につくばひける少  
武殿是を見給ひしより深く思を掛られ尼が傍らに近寄りた  
まひ面を上よと仰けるに尼いと恥かしげに顔少し上げしさ

し又た傳藏は整居申付お聞は尼となし一生縁付を許さずさ  
すれば双方武士は立なん御代替りの初めなれば此度の罪を  
問れず忝なしと思ひ速かに和睦をなし是より忠勤を勵み候  
へと上意と稱して諭したるにぞ双方共深く其理に伏し且尼  
公の御仁心を感じお聞さへ斯く仰付らるゝ上は我々別に挿  
むべき意地とても候はずとさしもの逆亂忽地静まりしは全  
く弓之助が一時の機變によるものなり斯て弓之助登城して  
此由を後室へ申上ければ紫光彈尼御感あつて御褒美として  
祿あまた賜はりぬ其時若殿龍壽丸殿御元服あらせられ元の  
如く大宰少武に任せられ給ふ此新少武殿或日感野に出給ひ

まは寔に玉を欺く斗りなり梨花一枝春雨に逢ふといふけは  
ひにて今の雨にそは濡れて哀れにたをやぎたる其姿墨衣も  
綾綴より生めきたり少貳殿名は何ぞと問せ給へば恵春と申  
す世捨人に侍るといふ殿は御歸るさに道々も近習に語らせ  
給ふは惜むべし絶世の佳人此叢に埋め置ん事を去にても美  
人の如何なる故に尼とは成りし訝しさよと心ありげにのた  
まへば追々馳付たる御供の内を知る人のあつてあれこそは  
足輕傳藏と申者の妹にて候と聞えしといふ殿點頭せられ元  
の名に改めて還俗せよと仰せあり遂に召仕せ給ひける外面  
如菩薩内心如夜乃と説れたる如く此お聞の方は顔ばせのあ

でやかに似もつかずその心いと怖ろしく奸才また類なか  
りければ佞媚をもつて君の心を蕩かし獨り寵愛を専らにせ  
しかば殿は何をかしてお聞を悦ばせんと早く傳藏を取立側  
用人となさしめらる傳藏素より佞奸なれば己に諂ふ者を願  
負し忠義の人を仇讎の如くに忌嫌ひ罪に陥し或は退けなむ  
するに世につるゝは小人の習ひ此傳藏が當路に取り入り利を  
得んと望むもの多かり爰に間瀬久太夫とて千石の祿を領  
し番頭を勤め一子久之進が爲に美女を求めて之を嫁にせん  
と種々心を費しけるに或人來りて足下の求め給ふ注文に叶  
ひたる娘こそあれそは秋月弓之助が娘にて深雪といへる者

こそ世に過れたる器量なり鐵の草鞋を踏破りて日本國中を  
索しても是より外にはあるべからずと勤めるに久太夫父  
子も其人柄は素より見もし聞もしたる故類に懸望して秋月  
家へ申入れたるに實明なる弓之助日頃間瀬親子が人となり  
を悪み其家風を卑み居れば客易受引べうもあらず事に虚託  
て断りを云たるに久太夫は猶懲すまにやる方なく密に計り  
頓て今日出なる傳藏に取入重く賄賂をなし殿の御聲掛りを  
ねがひ秋月の娘を嫁に仰付らるゝ様執成をぞ頼みける太宰  
少貳殿は傳藏がいふに任せて即日秋月弓之助間瀬久太夫を  
召れ汝等には似合頃なる子供を男女持たるよし家柄も相應

なれば予が媒酌して遣はす急ぎ日を書きて婚儀を調へ然る  
べしとの殿命に久太夫は大に悦びけるに弓之助ははつと思  
ひ素り心には濟ねども君命否むに由なく其座は先御受をな  
して塵々屋敷へ歸りしが快々として樂します妻の水青は夫  
の容顔つねならねば心を痛めて故を問ふに弓之助も嘆息し  
新君色に耽りて佞人を近付け給ふ早當家も季になりたり傳藏  
先年の事を意趣に思ひ折に觸れて我を辱しむ其上腹黒き間  
瀬久太夫を取持ち上意を借りて好しからぬ婚儀を成しむる  
事總て彼が斗ひによれり寔に奇怪なり國道なきときは去と  
聞くいざや暇を乞捨にして片時も早く立去るべしと女房に

もあかしたれば強ても諫めず密に其支度をぞなしにける感  
 日弓之助は月番の家老の宅へ至り封状を立關に差置古寶の  
 如く番頭の備正して鐵砲切火繩の者を左右に立せ家内を後  
 陣に圍せつゝ静々と旗を打立ける殿は弓之助が封状を見て  
 己が不足を云並べ推して暇を請捨にする杯言語同斷の曲者な  
 りと以の外に怒らせ給ひ追手を懸よと敦圍給ふを御母堂紫  
 光禪尼頻に殿を宥め彼が舊功を述られて止め給ひし故弓之  
 助は事なく筑前の國を引取り家内を供して京に上り今の岡  
 崎の屋敷を買得て移り住てぞゐたりければ是は之以前の岡  
 り爰に又秋月弓之助は娘深雪も今年にはや十六才にも成し

かば能き聲をとりて娶せんと妻の水青諸共に種種心を賣し  
 詩歌茶香の友達にさへ頼みて才かたち揃ひたる人を尋ねけ  
 り弓之助が和歌の友に加茂の祐包といふ人あり或日岡崎村  
 に來り弓之助に逢て言けるは兼て足下の望まれる聲こそあ  
 りといふ東福寺の月心和尙先頃浪人宮城阿蘇次郎と云人に  
 嵐山にて出會し事を語り  
 船浮て誰物の音にあそぶらん  
 嵐の山の花の木蔭れ

と詠みたる事また夕べの詩句

渡月橋頭人渡月月明却在里白間



と作りたる其人物の氣高きは更にも言す才器も古今獨歩な  
りと申されき拙者未だ其人を見ざれども知るゝ如くうらな  
き月心師の言事は偽は有べからず月心師は出家の事なり雖  
ぞ然るべき媒人を頼み申入て見給ふべしと言ければ弓之助  
は素より祐包の篤實を能く知り居れば尋常の媒人口とは思  
はれず深く信じてそは能くそ知らせ給へりさもあらば手づる  
を求めて語らひ見侍らんと厚く其好意を謝して種々響應し  
歸しける去共弓之助は生質順良に東福寺の月心とは親しき  
友達なるが夏の中は山籠りして下山せざれば態々尋ね行て  
半日の閑談をなし其席にて阿蘇次郎が人品をぞ尋ねける月

必がいふ彼の宮城氏は今の世の英雄にて寔に王佐の才ある  
人なり詩歌の類は其はした藝にして既に聞えし彼人の歌  
うき事の猶此上に積れかし  
と詠じたる心を味ひ見給へ大丈夫の器量にあらすや弓之助  
また其人柄を問ふに疵なき玉と知し召せと弓之助大に悦び  
震時また四方山の事語ひて歸りぬ弓之助次日も水背等と此  
事を語り出し宮城氏と親しき人もがな媒人に頼まんと考ふ  
るに日頃此家に心安く入來る醫者に立花鶏庵といふ者あり  
折ふし其坐に居合せ是を聞夫は幸なる事こそあれ其宮城氏

は子細ありて某とは日頃親しき中なればそれがし媒妁をな  
さば容易く事をなしめふせ申さんとしたり顔して阿蘇次郎  
が才と器量を口に任せて只管に譽そやしてぞ居たりけり

第八回

篤實温厚の弓之助が性として浮たる調子に乗ざれば何れ足  
下のお世話を蒙らん併ながら一應其人品を試し見た上の事  
にこそとて一人の娘の事なれば斯大事に掛け念を入るも  
理なりかく日も経しが弓之助はけふも見舞に來たる鶏庵を  
止めてはや八月の月にもなれり來る望の日は我宿にて月

見の會を催し堂上方二三人を請じ奉り例の祐包月心杯をも  
招くなり阿蘇次郎とやらんも一座せしめて其人をも見まは  
しければ貴老御苦勞ながら宮城氏へ月の遊には必ず入らせ  
給ひと我事を傳へ給まへといへば鶏庵は承諾頓て岡崎を立  
出て下河原にいたり阿蘇次郎に逢ひしかくの由を告げ秋  
月氏の高會には是非に行かせ給へど約しけり借も岡崎なる娘  
深雪は宇治にて見染し戀人は筑八が其名を書付呉し故宮城  
阿蘇次郎なる事をしれり今しも其人を聲にせんとの下心に  
て父が月見の催しを喜ぶ事限りなく母の水青は乳人の眞柴  
腰元淺香と顔見合せ打笑へども水青は物堅き夫を恐れて先

づ頃阿蘇次郎に盛狩にて出逢たる事をば深く隠し冊き共に  
も口止せし故皆々内証にて私語あひ勇み立てぞ見えにける  
頓て其日になりければ深雪は朝まだきに起出て白粉紅よと  
粧ひ飾り櫛は何れにせん簪は何れにすべしと立騒ぎつゝ鏡  
臺に向へば眞柴は娘の脊を打叩てあやかりに侍りなとと  
戯言いへば淺香も亦浦山しく候へなと罵りて家内は噪き居  
たりけり日も傾く頃立花鶏庵いさまさあへず駈來り扱扱殘  
念なり彼阿蘇次郎ぬし俄の病にて参り難し宜しく断り吳よ  
と申されぬ今朝見舞し時は風も大方さめし故随分行んとて  
月代をつゝみ居られしが後に誘しときは如何にも大熱にて

頭痛わるゝが如く高枕をして打臥われし故脈を窺ひ候に  
一方ならぬ邪勢なれば参られぬも無理ならず御兼題は讀置  
てはべる今宵の主に届け吳よと申されしと懐ろより取出し  
弓之助へ渡しける弓之助は請取て霎時あきれて言葉もなし  
妻も娘もほとく望を失ひかざしの花を風に取りられさやけ  
き月の黒雲に掩はれし心地して空さへしばしかき曇り彌々  
打しめりてぞ見えにける弓之助は阿蘇次郎が兼題を讀下せ  
ば美しくしき手跡にて

山の葉も今宵ばかりはなくもがな

入方をしき望月の影

春雄

宿に來り話の序に昨日は最遺憾き事こそありつれ惜むべし  
 辨に迷はされ又も懇に交りける或日鶏庵祐仙が三本木の旅  
 垢を謝入るに祐仙は素より愚しき者なれば早くも鶏庵の依  
 住て有けるに鶏庵とはしなく出逢ければ鶏庵は其かみの不  
 の為遙々都へ上り三本木にて川つきの座しさを借りこの頃  
 とひとりとど思案の頭傾けぬ爰にまた萩野祐仙は醫學修業  
 を深雪と記せり宇治にて逢しも深雪なるに此歌の心も訝し  
 と書たる書色いと露けし阿蘇次郎熱々と打守り此歌主の名  
 流れては末のうき身をいかにせん  
 おもかけへだつ宇治の川霧

と名を記せし是なん其日の秀逸とぞ聞えける明れば鶏庵ま  
 た入來りて宵の事なを問ひけるに弓之助は鶏庵に向ひ夕邊  
 の賓客達も宮城氏と一座せざるを遺憾なりと申されき宵の  
 客達の詠吟なりと己れ夫婦がよみ歌をも交へて鶏庵に渡し  
 序もあらば宮城氏に見せて給はれと頼みける深雪は我意を  
 速たる一首の戀歌を短冊に認め鶏庵が立歸る袖を引止め是  
 にも残りしと彼色紙の中に巻籠て渡せば鶏庵は何の氣も付  
 かず其儘懐にして下河原に至り阿蘇次郎が様子を見て弓之  
 助が口上を傳へ件の懐紙を差置て歸りける跡にて阿蘇次郎  
 は繰返し見る中に一枚の短冊挿まれあるを取あげ見るに

一廉の酒を呑損せしとつぶやくにぞ夫は何の事ありしやと云ければ鶏庵がいふ宮城氏を秋月弓之助といふ人ひとり娘の聲にせんとして先其人品を見まく思ひ月見の會を催し我等に取次せしめて招かれしが其日になりて阿蘇次郎病の爲に行ざりし故其事遂に水になりし嗚呼彼阿蘇次郎は福分薄くして絶世の美女を得ざりしと歎息して止まざりけり祐仙がいふそれは岡崎の秋月氏にて其美女の名は深雪といはずや鶏庵あやしみ如何にもしかなり貴邊はいかにして夫を知れりや祐仙笑つて曰く某先づ頃清水に詣しとき舞臺にて行違ひに其人を見たるが今の世の薄雪ともいふべき凄きまでに

美しかりき一目見るより肌しびれて酔るが如く夫より夜として夢想せざるはなし其日跡をつけて見に隠れに慕ひ行彼人の住める岡崎の屋敷をも見届け且隣りの婆婆に問ひて其苗字をも知りぬ常々清水の観音に願込して火物断せし奇特にや今日満願の日に當り足下より此手づるを聞出せしは正しく縁しのあるしるしなり如何に鶏庵その秋月氏へ某を養子に世話して給はれと聞て鶏庵笑を忍び思ふに阿蘇次郎と祐仙とをくらぶれば誠に是雪と墨なる違ひなり去共先年祐仙より金を借りし事ある故みすみすうちつけにおぬしは醜男なり此縁談整ふべからずとも言れずと思ひ成程計ひ見る

べし去ながら先には未だ其人は見ざれども阿蘇次郎が高名  
 を慕ひて聲にせんとの心得なれば他の人の事言出しても逆  
 も承引せらるまじ祐仙がいふさらば某を以て阿蘇次郎とな  
 して連行れよとノッピキならず言けるにぞ雞庵もほとく  
 困りきりさの給へども阿蘇次郎は月代頭なり君には烏芋の  
 如き元結のさまいかた容易く似せらるべき祐仙言やう何さ  
 ほど前髪剃る事難からんと言つて財布より小判三十兩取出  
 して先是は當座の手付なり出来なば多分の骨折代を参らす  
 べしと雞庵が前に差置に慾に目のなき雞庵なれば跡は野と  
 なれ山となれ先はび子の兎なりと直に金子を受納め左程思

ひ給はし施すべき手術もあらんと間に合せを言て其日は別  
 れ翌晩又雞庵祐仙が方へ來りければ祐仙手拭にて鉢巻し浴  
 衣のまゝにて出迎へ笑顔つくれば雞庵是を見て打笑ひ君も  
 亦風引給ひしか此頃の風の神は兎角色男にたゝる事よと戯  
 れけり祐仙手早く手拭とるに何時の間にかは元服してあり  
 ければ餘りの事に雞庵は笑ひさへ出ず居たりしに祐仙はい  
 と誇りがほ何と能似合つらん早く秋月氏へ連行給へと只管  
 頼みければ雞庵は逆もの序に今十四五両もせしめんと目論  
 見一日一日と左に右に日數をぞ過したる或日祐仙朝まだき  
 より雞庵方へ行き今日は是非共秋月氏へ引合せよと殿しく

せき立けるにぞ今は逃るゝ事ならずしぶくながら若替し  
て祐仙と打連一條もどり橋の宿をはなれ東山を廻りてこそ  
と伴へ行て四條の板見なし祇園林を徐々とためらい歩行に  
不斗向を見れば五十斗の侍一人の僕を召連來れば雞庵思は  
ず口迂りあれこそ秋月弓之助殿よと言ふに出あい頭に雞庵  
老此間は如何に見限り給ひし駒の道を切けん絶て御尋もあ  
らずといへば雞庵も是に應じて可憐に挨拶す弓之助重ねて  
彼宮城氏今程は御病氣も全快ありけるが手前は何時にても  
苦しからず必ず御同伴にて御入來あれと言けるに祐仙は先  
つ方より頻に雞庵が袖を引き宮城阿蘇次郎是に候と早く秋

月氏へ引逢せられよと私語にぞ雞庵今更何と詮術なく幸ひ  
宮城氏病氣全快にて是に同道致したり阿蘇次郎殿早く秋月  
氏へ御對面あれと弓之助へ引逢すれば祐仙は武士の身振を  
せんと頻にりきみ衣紋を正し某は宮城阿蘇次郎と申者以來  
御懇意を蒙りなん日外の御會の折は生憎所勞にて參上致さ  
す失禮と申残念至極なりと流石大内殿の御内にて家中の交  
際に武士の口上を覺えぬしゆへ後は知らず先は化濟しつ弓  
之助是を見より大に驚き霎時呆れしが世には又斯まで醜  
男もあるものかなと早心に八九分の不平を生じ覺えず冷笑  
ひつゝ言葉さへも交へず祐仙は仕濟したりとしたり顔して

鶏けい庵あんに向むかひ兼かねて懇望こんぼうせし秋月あきづき氏うぢに圖からすも御意ごいを得え何程なんぢやうか  
 喜よろこばしく途ち中ちゆうにては緩ゆるりと話はなし難がたし彼かれなる茶店ちやてんにて一ひと  
 献けん仕つかまつらんと強あがちに請じやうじければ弓ゆみ之の助すけは最た不興ふきやう氣きにて不承ふじやう  
 中なか村むら屋やが店みせに上あり葎たぐ簀す隠かくれに三さん人にん打うち集ぢひ物語ものごとふに鶏けい庵あんは  
 獨ひとり心こころを苦くるめ今いまや祐すけ仙せんが化くわの皮かわを顯あすかと手てに汗あせを握にぎり何なにか  
 頰ほ赤あかく耳みみほてりて針はりの筵むしろに座まするが如ごとく生なたる心こころ地ぢはな  
 りけり頓とんて仲居なこうぢとも種たぐ々たぐ酒肴しよかを持も來きり並ならぶる程ほどに祐すけ仙せんは近ちか  
 頭かぶ都みやこに登のぼりたる青書あおしょ生せいなれば充み分ぶん得意とくいの顔色かほいろにて只ただ管くだ亭てい主しゆ  
 振ふで弓ゆみ之の助すけへ盃さしさし体裁ていざいく甚はなだ不骨ふこつに野暮やまなる事ことのみにて  
 酌しやくをせんとて銚しやう子しを傾かぐる時とき袖口そでぐちより匂におひ袋ふくろの轉まひ出でたる

杯さき最たも可笑わらき景狀けいじやうなり

第 九 回

斯いかて祐すけ仙せんは何なにがな弓ゆみ之の助すけへ嬰應おんおにと日ひ頃ころ己おのが愚昧ぐまいを顯あし田  
 樂たのを串くしながら犬いぬに喰くせんとてわんと吠わろくと云いつゝ犬いぬに  
 與あへんとして誤あやまつ膝ひざに落おせしを拾ひろひとりて喰くふなさ沙汰さたの  
 限かぎりにぞ見みえにける弓ゆみ之の助すけは是こゝ等らの様よう子こを見みて益えき々々冷笑れいせうひ  
 此こゝ奴やつは世よにいふ名盗なとう人の類たぐひならん手て並ならを試たまして困まらせくれ  
 んと即座すなはち七言しちげん絶句ぜつこを作つくり對面たいめんの情じやうを迷まべお答こたを給たまはるべ  
 しと乞こひければ祐すけ仙せんも是こゝにははひしと差支さしへ早はやく韻字いんじを探たし



出さんと急ば急ば趣向も浮まず只管思案に暮れども生れ付たる不器用ものなればおのれが親は才智を澤に生付ざりしと只々頻に親を怨み小首傾け苦む事半日ばかりにして漸く作く上げ懐なる半紙にでいむしの道ふたる跡の如くにちり書して怖々差出せば弓之助取上げて此詩を見るに僅に平仄の合たる迄にて其未熟なる事云ん方なく其上手跡の拙さは恰も釘折を撒きたる如くなり弓之助忽地氣色を損じ遂に持病の疝氣起れりと挨拶さへもそこくにして其座を蹴立て岡崎の宅に歸り憤りすさまじく居間に通れば水青は娘もろとも出迎へて夫が氣色只ならぬを氣遣ふに弓之助は眼血

走りいさまきつ水青が常々時せし阿蘇次郎めに今日初めて出逢たりと云ば水青は喜び夫は先幸の事嘸かし好き男にてありつらんと云ば弓之助打腹立ち何馬鹿なる事丹波猿に均しき下郎虚名を賣りあるき身の形付をせんと工むけしからぬ大驅り鶏庵めも我に一ばい喰せたり其證據は是を見よ此詩の作りざまはと散々に罵り如何にしても心得ぬは祐包月心の輩なり彼人々に限りすゝろなる事は申されぬ筈なるに大驅めが人の知らぬ名歌名詩を盗み貯へ己が物顔に贈りし故彼衆も甘々欺れしは苦々しき事なりとついになき腹立ちなれば水青は更に合點ゆかず其詩を取上げ見るに其意は知

らす其字体いと醜げなるにぞ夫の憤は理りなれども眞の阿  
 蘇次郎が手跡とは驚と鳥の違ひなり是は極て如何なるゑせ  
 ものか阿蘇次郎に化て夫を欺さしと推しけれども其人に逢  
 しとは明て言れぬ時宜なるに娘深雪も肌身放さぬ朝顔の扇  
 子を父に見せたくは思へども宇治にて逢ては内々の事なれ  
 ば只もどかしさに母と顔見合せ打萎れてぞぬたりけり壺の  
 朝鶏庵見舞に來れば弓之助は家内の者に言付け與へは通さ  
 ず病と稱して逢されば鶏庵すこく立んとするを水青は袖  
 を引とめてそなたは聞えぬ人かな何故に旦那を欺し偽者を  
 逢せしぞ濟ぬ仕方なりと膝を敲きて詰りけるに腰元共は左

右より鶏庵をとらへしれたゝかにさいなむにぞ流石に鐵面な  
 る。鶏庵もほとく面目を失ひ其坐に堪兼命からく逃歸り  
 見れば我家には祐仙來りて待て居り片時も早く岡崎へ連行  
 と催促しければ進退爰に極れども色にも見せず成程秋月氏  
 へは能々言込置たれば何時にても飛行給へと一寸逃れを言  
 へば祐仙は實と思ひ急が岡崎へ行て秋月が玄關に案内す弓  
 之助是を聞より留守なりとて追返す祐仙は幾度行どもしか  
 ありけるゆゑさばかりの白痴なれども漸く其様子を悟り血  
 眼に成て鶏庵が許に來り種々繰事を並べ鶏庵が初に持逃せ  
 し二十兩に今度の手附と都合五十兩只今返せと罵りて腕を

まくり鶏庵にむしりつきしたゝかに打擲す鶏庵漸々押なだ  
 めさあれば先手附の三十兩丈は預先より取返し明日は返し  
 申べしと難なく欺り濟し其夜の内に諸道具を賣拂ひ逐電し  
 て行衛知れず憐むべし萩野祐仙性來の愚味とは云ながら只  
 一場の色慾よりゑせもの、畏に懸り前後五十兩の金子を失  
 ひ其業に似つかはぬ野郎頭に刺こぼてり此事既に隠れなく  
 世の人の笑ひとぞなりにける斯て下河原なる宮城阿蘇次郎  
 は所勞快氣しければ先つ頃秋月が月見の會に招きたる其好  
 意を謝さんと袴羽織なと立派に出たち今日岡崎を尋ね秋月  
 が玄關に至り宮城阿蘇次郎にて候秋月氏御在宿に候はし御

逢を願ひ侍ると申入ける腰元淺香は此聲を洩聞きもの透  
 より覗見て周章狼狽走り入水青に告知らす杯家内いそぐ  
 として喜びけるに弓之助は聲を勵まし取次を叱り高やかに  
 叫びけるを阿蘇次郎早くも聞き取り其儘口上を云捨一禮連て  
 ぞ歸りける程經て阿蘇次郎が下河原の宿に肥後より飛脚下  
 り事あるに依り此書狀着次第此者を召連れ即日に来るべし  
 と申越ける故阿蘇次郎は驚きて家を片付歸心矢の如く夜を  
 日に繼て下りける夫は阿蘇次郎が父廉助ははや没し老母が  
 九死一生の病に臥し露命旦夕に迫りしに一門の人々を集め  
 けるに和田三浦の一家の如く幼少の小供迄を數ふれば九十

人に餘れる親類なり世に在るうちにどて夫々に遺物別して  
後老母は一座を見流し頓て末期の盃を献酬せしに霎時は座  
も静まりて何となく打ちめりぬ此時子持の嫁ども母御前は  
聊かの逆事なく一人の孫をも先立て玉はず十分の果報いみ  
じき御臨終なれば此世に思ひ残りはあらせ玉はじと言ひ慰  
めければ老母は重き枕をあけて今しも其方達の申さるゝを  
聞ば我臨終果報充分なれども爰にひとつの心残りこそあり  
未の子阿蘇次郎は一度御國を出しより今に其行術を知らず  
互に御上を恐れし故雁の音信も絶果たり夫と違ひ我は女の  
愚痴未練今此座に連りたる九十人の人々より阿蘇次郎をた

い一目見て死にたしと覺えず聲をふり立てさめくと泣け  
れば夫は道理よといふよりも一同悲歎の涙にくれにける人  
々此有様を見るに忍びず色々相談の上能きつてを頼み御部  
屋雲井の方に御聞に入れしにも憐れと覺されて此事ひ  
そかに伺ひ給ひけるに御殿の仰せに彼は切腹代りの追放な  
り召返す事は叶わぬぞ去ながら是迄にも罪あつて追放せし  
もの晝の内は憚りぬれども夜は陰に忍び來るよし不届なる  
奴原なれば家老共に申付急度吟味に及ぶ筈なれども凡そ國  
を治る事は重箱の掃除を摺子木にて洗ふが如く隅々は行届  
ぬが宜しきものぞと有けるにぞ雲井の方より早速此内意を

知らせ玉ふに一門の者共大に悦び扱こそ斯急飛脚を立て俄  
 に阿蘇次郎を呼下したるものなり扱も阿蘇次郎は取る物も  
 とり敢す都を立出しが程なく肥後國に下りて夜に紛れて屋  
 敷へ至り旅装の儘にて母の病間に打通り枕邊に近付て阿蘇  
 松にて候御氣色は如何にあらせ給ふといふに母は聞よりこ  
 は阿蘇松か懐しやと待こがれたる我子の顔ひと目見るより  
 莞爾と笑ひ眠るが如く往生せり人々の歎きは言はん方なし  
 中にも阿蘇次郎は落涙せきあへず聲を放ちて悲しめり喪の  
 内に奥深き持佛堂に閉籠り七日くの速夜をつとめ香花を  
 供して百日の間在すが如く仕へしがさてしも名残りは盡ね

とも御構の身を憚り又も國元を出たち南の關を出で筑後の  
 内なる或る山家に些の好みを便りて行き爰に里人の子供等  
 を集めて手習の指南をして營業とし母の禮牌を祀り東の方  
 を望んで遙に兩親の塚を拜み斯して一年の喪を勤め了りぬ  
 ればまた都へ登らんと其支度を調へ此所を立出日を重ねて  
 長門の赤間が關に至り阿彌陀寺の舟を借りて順風に帆を揚  
 げ行に程なく播磨瀨明石の浦にぞ着にける此夕後ろの山よ  
 り僅の雲起ると見えしが忽地一天搔曇り恰も墨を流すが如  
 く刺さへ雷鳴渡り物凄まじき氣色なり良有て雨風止みぬれ  
 ば海水は長天と色同じき迄に晴渡り頓て一輪の月影雲間よ

り 洩 出 る 所 は 名 た る 須 磨 明 石 向 ふ の 方 は 淡 路 島 蛇 の 道 へ  
 る が 如 き は 阿 波 の 眉 山 黛 の 如 く な り 此 時 阿 蘇 次 郎 は 結 端 に  
 在 け る が 不 斗 思 ひ 出 し け る は 先 年 宇 治 の 笠 狩 に て 圖 ら ず も  
 絶 世 の 美 女 に 出 逢 し が 其 折 も 斯 く 皎 き 月 の 夜 な り し が 所 は  
 變 れ 今 月 今 日 今 其 人 は 如 何 に な り け る ぞ 年 は い さ よ ふ 頃 な  
 り し 今 頃 は 齒 を 染 め 袖 を と め て 誰 が 金 屋 の 花 と や な り け ん  
 其 後 手 に 入 り し 一 首 の 戀 歌 は な が れ て の 末 の 浮 身 は い か に  
 せ ん 係 へ だ つ 宇 治 の 河 霧 そ の 名 深 雪 と 書 た る を 懷 紙 に 卷 添  
 へ 贈 り し は 我 に 眞 情 有 る や な し や 懷 し の 都 鳥 言 問 ふ 由 も 波  
 の 上 に さ し う つ ぶ け ば 襟 元 に ひ や り と 落 た る 苦 の 粟 に 思 は

す 仰 向 く 後 の 方 は 千 石 船 の 水 押 の 下 な れ ば 扱 は 先 の 夕 立 に  
 彼 船 に 舫 ひ あり し か と 獨 り ち ち つ 跳 め け る に 海 面 は 益 々  
 和 ぎ て 見 え 渡 り け り

第 十 回

松 吹 く 風 も 音 絶 て ぬ し は 誰 と も し ら ぬ ひ の 心 筑 紫 の 琴 の 音  
 は 確 か に 隣 り の 船 な り と 耳 峙 る あ な た に は 未 だ 曲 を ば 成 さ  
 れ ぞ 最 情 有 る 音 々 に て 寔 に 爽 々 と し て 俄 雨 の 如 く 小 絃 は 颯  
 々 と し て さ し め ごと の 如 し と 云 へ る 思 ひ あり 春 雄 は 霎 時 聞  
 入 り て 覺 え ず 感 涙 を 催 し 腸 を 斷 つ ば かり な り し が 曲 果 て し

紫光院殿の御心付にて秋月弓之助を召歸され此大亂を鎮む  
 べしとの上意なり弓之助初め國を出し時は再び本國へ歸ら  
 じと思ひしが弓之助未だ小性立のころ御雛子の席にて諸損  
 じ既に罪せらるべきを紫光院殿其頃には御簾中にて未だいと  
 若く新羅の前と申されしが殿へ御説言仰られ種々御執成あ  
 りし故危き命を助かりし大恩須彌より高く蒼海より深けれ  
 ば此度は枉て御母公の御内意に従ひ急はしく支度をなし岡  
 崎の宿は妻水青に仕舞はせ跡より下るべしと手はづを定め  
 己は先娘深雪を供し住馴し都を立出浪花の港よ國司の御  
 手船に乗りて下りけるが是も先の俄雨に逢て此明石の浦に

後また音なし只風清く月白さのみ春雄思ふに扱も怪しき事  
 かな今の唱歌は我昔し三筋の糸に調べし朝顔の曲なりさる  
 を如何なる人のいかなれば斯る船路に彈せしぞと徐に疑ひ  
 居たりけり是はこれ別人ならず秋月弓之助が娘深雪にぞ有  
 ける如何なれば今此船に在て琴を彈せしぞといふに是より  
 先舊藩主太宰の少貳殿姫婦お蘭を愛せられそれが兄足輕傳  
 藏を取立國政を任せられしが傳藏はもと匹夫なる故君の威  
 をかり古參の人々をないがしるにし不時の課役を懸けて民  
 を苦めければ領内の百姓共一揆の企蜂の如く起りて袖が浦  
 の城下に詰掛けお蘭傳藏を賜はるべしと強訴に及ぶ御母堂

合せし故夫が持るうらま琴を借りてひと年深雪が母水青が  
 宇治にて弾ける梅が香をいみぢう妙にあやとれば隣りの船  
 なる深雪は此音を聞いて耳をそばだて眉をひそめ聞ば開程其  
 人を見たく思ひけり素り深雪は音律を知る事類なく我戀人  
 の音めとは臍氣ならず推せしより臥床を忍出さし足しつゝ  
 やぐらに登り手摺に寄て見下すに折よく阿蘇次郎も苦押は  
 ねて窺へば彌清朗き月明りに思はず見替す顔と顔深雪も春  
 雄も夫と見ては懐しと言んとせし後よりいつの間に来りけ  
 ん弓之助娘の帯を取らへてやれ浮雲しと引入れば深雪はや  
 るせなき儘に我ある事を知らせんと記念の扇子を取も敢へ

泊り居たるなり扱又弓之助が娘深雪は宇治の壘狩にて阿蘇  
 次郎を見初しが同じ都に住ながら再び相見る由もなく其上  
 るせものゝ爲に妨げられ剩さへ筑紫へ下りなば逢ふよしも  
 あらんと忘るゝ隙もなく只管焦れつゝ心地さへ例ならず先  
 の夕立の怖さに薄衣を引かつぎて臥居たるに打静り海面も  
 なぎたりと言ふを聞いていと物憂げに起出しが船口に差入る  
 月の光あかくして白日の如く夜も更て人皆眠りたるにそあ  
 りあふ須磨琴を掻鳴し我戀人の作りたる朝顔の唄を調べ想  
 ふ心を合ませせて哀れげに弾じけるに阿蘇次郎此曲を開終り  
 且怪み且床しく只其人の懐しさ幸ひ京へ登りける法師の乗



す春雄を目掛けて投りけるに誤らず阿蘇次郎が膝の上に落  
ければ阿蘇次郎は取る手も遅しと押開き月にかざして見れ  
ば覺ある朝顔の繪なりさればこそ推せし如く先の方の琴の  
主も深雪にて有つるよと益々深雪が眞實を知り身に染々と  
感じける深雪はたまの逢瀬に言葉も替さず只管かちて居  
たりしが父が寐入るを待兼て又も漸々に忍び出怖さも忘れ  
て櫓よりさし覗くはづみにとらと浴にけり阿蘇次郎驚きて  
見てあれば深雪は天満に落倒れて息も絶る斗の有様なるに  
擁き抱へて氣付を含ませ種々にいたはりければ深雪は漸々  
人心地つき阿蘇次郎をじつと見ていと嬉しげに打守り知し

召かは知ねども私の名は深雪とて筑紫の浪人秋月弓之助が  
娘にて候そも宇治の川舟で不斗見染たる縁しより其螢火は  
こがれねを妾が胸の内にては月の莖も徒らにいたつき給ふ  
つれなさは月にむら雲花に風仇し媒人に欺れ様々の妨に逢  
しより只一筋に縁の綱思ひ細りて玉の緒も絶ぬらん未だ枕  
はかはさねと雨夫に見えぬといふ操を露許りも哀れと思し  
夫婦となつて給ひねと膝にひれふしむせび入つ口説ける  
阿蘇次郎も深雪が心根を思ひ遣り夫は理よ我とても色に出  
ぬる戀衣はや重ねたく思へども娶るに必ず媒人あり互に武  
士の家に生れ何ぞ不正の事を成す心さや我望を遂し上は然

るべき媒人を以て表向にて申入ん無事に在して折を待れよ  
早く船に歸りてよ重ねて邂逅となだめすかして別れんと  
す深雪は怨の涙にむせび斯まで想ひ慕し身の偶逢ふて此儘  
に歸れどは曲もなしあはれ此身を何處にも連れて退て給はれ  
かし若も此儘本國なる筑紫へ歸なば間瀬久之進と言者に祝  
言せよと無体に殿の仰の候假令命を失ふとも異夫にまみえ  
候まじそは左まれ右もあれいざはや連行給へと掻口説けば  
阿蘇次郎は彌ふびんに思へども我今御身を連退かば御両親  
の恨を受け無上の謗を如何にせん心短かく思さすと疾ひ有  
とも虚りて延し玉ふ内には仕様もありません先々船へ歸り給

へと種々に説諭せども聞入れず如何程申ても承給はずは是  
非もなしさらばと一聲身を躍らせ千尋の海へ飛入んとすれ  
ば阿蘇次郎は周章て抱き止め左程に思す事ならば如何にも  
望みに任せなん我小節に係りて秋月殿の愛子を見殺しに  
せんも不仁なり祝言は左も右も如何に汚名を蒙るとも斯く  
實ある情人をいかでか強面く見果つべき必ずはやまり給ふ  
なと制す言葉に深雪は居直りて素より母は事情を知らば斯  
る事にて立退しと跡にて聞給は悦び給ふは必定なれば妾  
は恙なく君に從ひ立退くを只一筆書殘さん硯があらば貸給  
へといふに阿蘇次郎腰を探りて頭を掻き南無三寶先つ方狼

狼て墨斗を海へ落したり是は如何せんと言へば深雪はさら  
ば今一度船に歸りて書置を残り亦些の手廻りを携へ参りな  
んと阿蘇次郎に腰を押れからうじて船に登り我臥床に至り  
て急はしく書置を認め其儘父が枕元に差置立んとせしが若  
や又是が一生の別れとならんも測り難しと父の寝顔を唯一  
目と心斗りの暇乞せんものと打寄りて見てこは悲しきは只  
戀のみ浮身をやつし常々不孝に過せし故天の御罰や蒙り  
けん父君は余引かづぎて臥し給へば御顔を拜む事叶はずさ  
あらばお目や覺し玉はん如何はせんと思つ居いつとゆみな  
がらにおづくと蒲團を少しまくれども何も知らず只す

やくと寝入たる其顔を熟々打守りあら勿寐なや不義と云  
ふにはなけれども思ふ男に添途んと御暇申て出て行不孝の  
罪は許させ玉へ跡にて嘸や歎き給はん名残惜しやと聲を呑  
み流石別れの悲しさに覺えず懸る涙の雨父弓之助は目を覺  
し娘が様子心得ずと其儘裾をかひつかめばこは悲しやと泣  
出すに側なる書付を弓之助取らんとすれば深雪はあはてし  
窓より海へ投出せし此物音に侍女もこは何事と立騒ぐに  
船頭も起出て水夫共を呼起し沙も能きぞ早々船を漕出せと  
叫聲に勵され水夫は一度にかけ聲しつと鐘をおこしやをら  
布帆を引揚れば船は忽地矢を射る如くに走り出で阿蘇次郎

が乗たる小舟とは東西に引分れたれば又も縁しを隔てける

第十一回

花に百日の盛なく人に百才の壽なしと言は宜なる哉大内  
介殿の儒者駒澤了庵老病にて早や危篤に迫りければ親類を  
枕元に集め了庵不肖と雖も二代の君に仕へて輕からぬ君命  
を蒙り剩さへ老中の職をも汚しつ抑も我政事加談の職と言  
ふは戰場にて軍師の指揮する如く治世に於ての相談役にて  
當家にては古來より我一人に限り未だ類なき重職なれば我  
跡を續する者我甥宮城阿蘇次郎ならでは外になし然れ共彼

もと青雲の志あつて御直參を望み居れば我跡を譲らんと言  
共容易く承引すべからず去に依り我死したりとも其儘病ひ  
重しと偽り急ぎ都より呼下し此遺書を見せ各々勸めて玉は  
りなば今日を閉るとも聊か恨は残らじと懇切に云置しが程  
もあらせず無情の風に誘はれ哀れ慕なく黄泉の旅に赴きけ  
る去程に阿蘇次郎は去る夕の俄雨にさまたげられ明石の浦  
に船やどりせしがはしなく秋月弓之助が娘深雪に邂逅ひ其  
が貞操の情にはだされて連退んとせし折からゆくりなくも  
深雪が船は俄に帆を引揚て馳出せしゆ忽ち東西に引別れ  
しかば夫より都へ上り元の下河原の宿に居たれども心の内

には其人を忘るゝ隙なく猛き武士と雖も戀には想ひよはる  
習ひ只快々として樂しまず斯る所に周防山口より火急の消  
息して叔父了庵重き病に臥し息ある内に云ふべき事あり片  
時も早く來るべしと申越ければ又も席をあらたむるに暇な  
く恩ある叔父の事なれば最氣遣はしく思ひ取るものも取り  
敢ず其日の内に出立して道を急ぎ行ければ頓て山口なる駒  
澤が屋しきへ至りぬ親類共は待受て阿蘇次郎に向ひ主人了  
庵はや事切れたり故翁いまはに認められたる書あり和主に  
渡し吳よとの遺言なりと告げるに阿蘇次郎聞もあへず双眼  
涙にうるみ急はしく遺書を開き見れば了庵代々主恩を蒙り

莫大の御取立に與り重職を辱けなふすされども一の寸功を  
も立すして今徒に相果るは残念なりあはれ汝枉て此家督を  
継ぎ我に替りて國の爲家の爲に誠忠を盡し吳よと震る手に  
て悉く書遺したるにぞ阿蘇次郎も悲歎に昏れ義理ある叔父  
の死後の頼み扱も余義なき事ともなり我宿志を遂んとて強  
て否むは道ならずと心を決して背ひければ人々悦び頓て一  
通の願書に了庵病危きに依り甥なる宮城阿蘇次郎を急養子  
になし度趣きを認め親類の何某是を月番家老に差出し其取  
持を頼みげらるに此由家老衆より上聞に達せられしかば事故  
なく御聞濟有て家督相違なく仰付られたれば姓名を改め駒

澤次郎左衛門と稱しける未だ中老職は仰付られねども先規  
の如く政事加談役にぞなされける是全く次郎左衛門年若  
れども才學世に勝れ又其性の温厚の聞えあるに依れり  
頃て次郎左衛門は父が葬式祀りなご形の如く執行ひ七日  
日の忌も果にければ日毎に築山の館に出仕し奉公をぞ願  
ける次郎左衛門の養父了庵が遺言をかたく守り君の御大事  
には一命を塵芥よりも輕じ無二の誠忠を盡さんと心懸し  
奇特なり次郎左衛門は加談職の事なれば常々家老衆より政  
務を談せらるゝに職分の事なれば一々是を辨論するに其判  
斷甚だ明白にて極めて道理に協ひ又人に勝れたる了簡な  
ども

ありける故家老の面々も其才養父にも優りて當世無双の若  
者後々は御用にも立ちべきものなりと最頼母しくぞ思ひける  
然れども次郎左衛門は彌々謙遜り聊かも出過たる事を成ね  
ば人の目かどにも立ちざりけり斯て數多の月日を過しが當主  
大内之介多々羅滿興朝臣は參勤して鎌倉に在ししが當時新  
大磯の廓第一の大夫松葉屋の瀬川といふものゝ艶色に迷ひ  
て晝夜淫酒に耽り營中の勤務も怠りがちなるにぞ誠忠の近  
臣どもは替るゝ諫言を奉るに其度ごとに都て御手討にな  
され猶其上にも荒々しき御振舞の多かりければ仄に聞えし  
にや或時管領上杉殿より大内家の長臣冷泉帶刀を召れ備興

殿放蕩の聞えあり事明白にならざる内再應諫めて行を改め  
なば珍重なれど若も此上慕るに於ては數代連綿たる國家に  
は替らるまじ早く世繼を願ひて介殿を押籠置き然るべしと  
御内意仰渡されけるに冷泉帶刀長まり承りて退出せしが愁  
歎大方ならず急ぎ本國へ急書を下し管領より云々の御内意  
なり事遅々に及びなば臍を嚙とも甲斐なからん早く評定に  
及るべしとの文面なり斯て急使寸刻を争ひ馳付けるにぞ當  
家の一族山岡玄蕃允を初めとして老職列座にて此急書を開  
き見て各々色を失ひこはゆしき大事なり然れば大評定を開  
なすべしと一家中に觸流して騎士以上の者ども一人も残ら

す惣出仕を成さしめ大書院には山岡殿を上座として家中の  
面々格式に従ひて座に就けばさしもの廣間にも居餘りて椽  
側までも人ならぬ所もなし月番の家老相良主馬満座を見渡  
し帶刀が來書の趣きを言聞せ御家の安危此時なり假令小祿  
の者たりとも忠義を重んじ思ふ所あらば憚りなく申されべ  
しとぞ述にける是を聞き一同平伏せしが是迄諫言せし者は  
悉く御手討にあひしと聞恐れを懷き各々眉を顰め讓合ふ而  
己にて一言も發する者なし又重役の人々詮議區々なりと雖  
も何れも今一應諫言を奉るに如すと云ふより外にさせる良  
策もあらざれば先其日の評定は徒ら事とぞ見えにける斯て

三日四日と打續に家老を初め一言を出す者もあらざりしが  
駒澤次郎左衛門は我若年の分を願みて數多の歴々の中には  
何と加言出る人もあらめと黙して扣へ居たりしが未だ評論  
定まり兼ね徒に數日を費すを迂しくおもひ列を出て言やう  
不肖の僕れ御歴々の御前も憚らずさしでがましく候へども  
當家の危急存亡の秋に當り思ふ旨を申さざれば不忠なるべ  
し殿には左ばかり放蕩に在しますとも素り聰明なる御方な  
れば臣たる者は只管實を盡していつまでも諫め申に如はな  
し僕れ思ふ子細あり御諫言申上やうの手段あれば御許を蒙  
り急ぎ鎌府に罷下りなば恐くは仕合せ得らるべしと發言せ

しが執事山岡玄蕃允は胸に一物あつて斯殿の不行跡なる沙  
汰を聞きより心の中に密に喜び己が嫡子を世繼に立たく思  
ふ故今若駒澤が異見を用ゐて鎌倉へ下しなば極めて大望の  
妨げなるべしと思ひ駒澤が言葉を挫きて殿へ直に諫言とは  
心得ず是迄諫めし者を手討にせられしは幾人と言ふ事を知  
らず今又諫めんとせば徒らに怒を培のみにして益なし十全  
の奇計にあらず老輩を差置き若年の身を以て諫言杯とは片  
腹いたし扣へ召れと支ゆれば次郎左衛門長より仰の通り拙  
者如き素より其人に非ずと雖も此度家督の御禮と稱し君へ  
見参さへ致すならば施すべき術の候なり何卒此御役仰付ら



らせ参らせしかば此騒動を奇貨として大内家を横領せんと  
 巧みし奸臣佞人とも妨嫌者に思ひけりされば短慮裕達の大  
 内殿も忠臣次郎左衛門が諫言に従ひて遂には學問にのみ心  
 を入れ賜ひ世に賢明の君と仰がれて國家を泰山の安きに置  
 しは皆駒澤が奇策に出でて實に前代未聞の名臣なりと此頃評  
 判高くして其智實徳行おぞ賞めにけるが駒澤未だ妻なしと  
 聞て娘を持たる者は皆聲にせんとして縁談を申入る事限もな  
 し無れども次郎左衛門阿蘇次郎たりし頃秋月弓之助が娘深  
 雪と二世を掛ての縁しを結び故信を守る事金石の如くな  
 れば何程歴々の家柄より縁を乞ひ需めらるゝとも都て斷り

れたしと丹誠おもてに顯れければ相良主馬も傍より駒澤氏  
 が思慮ある事は各々も知るゝ所なれば其望に任せ下向なさ  
 しむとも恐くは失なかるべし主馬は受合ひ申なり各々是に  
 決せらるべしといふ列座の者は敢て拒む者なく異口同音に  
 此儀最も宜しかるべしと申しけるにぞ山岡も詮方なく多數の  
 衆議に決して遂に駒澤次郎左衛門は鎌倉へ下す事はなし  
 ぬ斯て駒澤次郎左衛門は急に旅支度を整へて鎌倉へ下り佞  
 臣等の拒み遮るを厭はず強て大守に面謁を願ひ素より英敏  
 秀才の士なれば機に望み變に應じて忽地に太守の意に適ひ  
 遊里の供などしなからに徐々と諫言を呈し遂に亂行を止ま

敢てとりあはざりければ駒澤氏は聞えよき人なれども内心  
は色好みにておしなへて縁談を否まるゝにやと怪む者もあ  
り又は才智勝れた人なれば如何なる望みか有ての事ならん  
と思ふもあし折しも秋月弓之助は主君の使節を兼ね大  
番に交代して此折鎌倉に下り桐ヶ谷なる少貳殿の屋敷に在  
て駒澤と言者は當時無雙の豪傑なりと傳聞き娘深雪を妻に  
送り親類の縁を結ばんと其人を知る者に頼みければ彼人言  
やう是迄御直參の歴々方より申入るさへも駒澤更に承引す  
迎も此縁談整ふまじと聞ども枉て是非とも申入られて見ら  
れよ假令徒に勞する程にもせよ某が一生のこゝろやりなれ

ばと只管頼みければ媒人も今は止事を得ず仇事にならんと  
は思へども申入んと駒澤に逢ひて其由を告ければ次郎左衛  
門案外の事に思ひ宇治にて逢たる娘の名は深雪とは覺えし  
が其の父の名を知らざりしに圖らずも明石の浦の月の夜に  
不思議と舟にて邂逅ひ其時初めて秋月が娘なる事を知りた  
るに今斯家老職にも成たるにぞ遠からず山口へ下りなば彼  
人は程近き筑前に在るなれば婚姻を求めんとせしやささへ  
媒人來りて斯言出せしかば喜ぶ事限りなく猶念を押して太宰  
少貳殿の御内なる事を問ひ益々安堵し一義にも及ばず承引  
す媒始は事の成れるを喜びて直に秋月が宿所に馳行き此趣

ち旅にしまさる憂を重ね無な妾を實なき者とや思せらん只  
 一筋に慕ひしものをはや忘やし給ひけん殿子は心多きもの  
 と聞く都の花にうつろひしとぞ腹立しけれなと深く思へば  
 うき寐鳥獨りかたしくうき袖が浦いつかは君にあひの島海  
 の中道中々にいきの松原風絶ていつか心地さい例ならず三  
 伏の熱氣もたれ込てのみ過しにる秋月弓之助は娘が斯る心  
 意氣とは露知ず然れどいつぞや明石の浦の船の上にて深雪  
 が文めく物を海へ投入頻に悲歎に沈みたるそぶりを怪み若  
 や言替せし戀人の有て戀慕の餘りしかせしならんか假令彼  
 が慕ふ者は如何程の人なりともよも駒沼が氣量には及ぶま

第十二回

きを告げるにぞ弓之助の喜び譬んに物なく斯速かに事の整  
 ひしは娘深雪が密に語ひ置し事とは夢にも知らず全く是は  
 我福分なるべしと心に自慢を生ず取敢ず贈物して喜びを表  
 し厚く媒人に報ひける

世の諺に言ふ會は別れの初めとやらん深雪は圖らずも阿蘇  
 次郎と明石の浦邊にて邂逅ひ二世の契を約し走り去らんと  
 支度せしが其船俄に出帆せし故心ならずも父もろ俱筑紫へ  
 下り吹岡の屋敷へ歸り住一間に籠りて物思ふ身は故郷なが

し深雪は深窓に人となり眼のうち未だ廣からず我四十年以  
來天下に奔走せしか未だ駒澤如き才智揃へる人を見ず然  
れば渠若一度駒澤を見れば極めて否む事はあらずと此趣きを細  
々と認めたる一封の手紙を急ぎ本國筑紫へ遣はしける吹岡  
なる秋月が屋敷には妻の水青は老實しく夫の留守を守り日  
々其消息を待けるに今日しも家來が鎌倉より御使に参り候  
とて文箱差出せば水青は夫の状を見るに無事とあるに先安  
堵して封おし切て讀了り一度は悦び一度は愁へたり悦べる  
は能き聲を得たるが故愁るは娘は別に戀人有て常に慕へる  
氣はひなれば如何なる凶事か仕出しなんと思ふが故なり水

青は篤と思案を定め娘を諭して玉を全ふせんに如じと乳人  
の眞柴を納戸へ呼寄せ密に相談せしに腰元浅香は不斗是を  
漏聞き深雪が部屋へ走り行てお嬢様今鎌倉よりの御使は云  
々の事に候と私語きければ深雪は聞より胸つおれ霎時照も  
なかりしが此時浅香は奥にて呼るゝに立行ける跡にて深  
雪はひとりこち扱は斯る憂事を聞ん端か先の夜の夢見の悪  
かりつる殿の御聲懸にて心に濟ぬ言名付に遇んとせしを年  
月の苦に病しが圖らず間漸久之進俄に病て亡たるにぞ漸く  
一ツの煩ひを除きたるにさもある上は想ふ人に添途んと佛  
に祈り神に願ふ力も仇に思ひさや今日の便に駒澤殿とやら

りて婚姻の事を知りしならんそなたの心の中に戀慕ふ人ありとは疾より推したるもや思ひも寄らぬ此度の事をなれたる心は濟ぬとは思ふらめ先父上のお文を見よ聲と言ふは鎮西の探題六ヶ國の主大内介殿の御家老駒澤次郎左衛門殿として三千石の知行探り鎌倉一の武夫なるより其上文道にも賢く萬の事何一といふ事なく世に稀なる男にて色は雪より白く器量骨柄天晴なる男なり分に過たるよき聲を得たりとあの物堅き父上の此様に器量の事迄細かに書せ給ひ加之駒澤殿の人品を慕ひ御旗本の歴々方より娘や妹を遣はさんと懸望ありしに駒澤殿如何なる事にや固く辭りしかば鎌倉中の評

んに嫁入せよと無體な父の命かな妾が身に戀人有て如何なる義理約束のあるとは露ばかりも推し玉はで早や言名づけをさせ玉ふとやお情なき成れかたと先づ年は殿を怨み今日押あてよとこを泣出せしはなべて情ある女のけはひなり母の水青は此体を見て傍に人なければ咳しつゝ入りければ深雪は遽然居直りて襟搔繕ひ泣ぬ風情に取紛らせと愁思面に顯れければ水青は近く側に寄添ひ娘が脊を押なでし道理なりく脊丈の延たる娘をば未だ生娘と思へるは子には目のなき親心やよ深雪其様にむづかるな其方に淺香が口ばし

判となり媒人なかりしが是こそ氷月神の縁にや此方より申入るが否直ちに承知有りしとかや然ば父上の仰畏み承知し  
てたべさもあらば親への孝行其身の冥加なりこなたの慕ふ  
は前かた宇治の里にて一度見られたる宮城阿蘇次郎殿の事  
成べし其人は浪人と言ひ其後更に様子も聞ず殊更鶏庵めが  
誑りなぞ色々障あり斯る間違あるは必竟これ縁のなきが  
故ならん縁ある時は千里の外も會ひ丁度此度の駒澤殿  
の如く速かに事の整ふこそ深き縁のあるといふなれ此理解  
をよく辨へま鬼にも蛇にもあらぬ母が無仁の斗ひ耻を言ね  
ば理が聞えぬといふ世の諺にも縁あるなしのいはれといふ

(145) 朝 願 日 記  
は現在この母が身のうへ話し十八年以來つゝみしが今慈子  
の可愛さに耻を忘れて語るぞよ妾未だ若かりしとき乳母の  
媒に依て若氣の至り跡先見す里の隣なる瓜生主水といふ武  
士と一人知れず契を結び末の松山波てすとも互の誓ひは違へ  
じと一年餘りを過せしうちそなたの爲には祖父様わが父宇  
佐見彌五左衛門殿或日御城より下り給ひ母上に申さるゝや  
う今日には圖らず御前に召れ娘水青はやかしづきの頃なれば  
幸ひ秋月弓之助とは同等の家柄年頃も似合しよし弓之助は  
至て利發者なり予が媒妁にて婚姻申付るぞと有難き御上意  
弓之助が人品家風は素より望む所殊に嚴命忝なく早速御請

くば此場に於て手に懸て殺してたべと種々に怨みたれば其  
 思ひ切難しいさは是より何處へなりとも連れ退き給ふかさな  
 えず齒切をなして夫は餘りなる仰せかな妾一度言替せし事  
 は聊も心を残さずと言放されし故是に腹が立まいものか覺  
 なんおぬしは忠と孝との爲に秋月方へ嫁入し給へ我に於て  
 全くと天より授け給ふ因縁と言者なり我は今よりふつと思切  
 りにて奥方新羅の前御取持となれば等閑ならぬ重き事は  
 なりしは是迄の縁にてありつらん又おぬしは殿の御聲がし  
 親なりせば疾く耳にも入れて相談をも成べきを斯手遅れに  
 に養母の手前是彼と心ならず延て今日となりたり眞實の母

申たり殿にも満足に思すとの御意にて御酒をさへ下されて  
 御勤め有ける故よき機嫌にて歸り然あらば近日弓之助方よ  
 り日を撰び結納を送り來るべし此方にも早や用意をなすべ  
 しと悦び給ふ故母上は更なり家内はさしめきて祝ひ囃せを  
 も妾は夫に引替て丁度そなたの様に驚き思ひ詰やるかたな  
 さに其夜塀を乗り越て隣屋敷へ忍び行主水殿に逢ふて事の子  
 細を詳に語りこは何とせんと氣もそぞろ浮沈に迫る我身の  
 上如何い斗ひ給ふぞと泣つ口説つせし内に主水殿も思案に  
 喜し体なりしが稍あつてこは是非もなき次第なり知るゝ如  
 く我は此家の養子なり折を見て縁談申入んと心掛しは流石

時主水殿の言るゝには夫は女の一途といふもの也然あるべ  
 き事なれども能々事を辨へ給ひ我は養子の身分色に惑ひて  
 恩義深き母を捨て養家の名跡を絶させ又弓之助にも出付女  
 を妻にしたりと世上に笑す事は又人情の忍びざる所なり孝  
 義は天の道色は人慾の私を聞天の道を捨る事は我は得せぬ  
 程に是非共に死んとなら早く歸りておぬし一人死玉へとい  
 ふにより餘りの事に興覺て呆れ惑ひて家に歸り熟々思ひ廻  
 らすに一人死ねといふ程の不實者に義理を立不孝者と世に  
 笑はるゝも詮なき事あの様に不實者なれば來世の契も頼み  
 なし憎さもにくし主水殿への面あて旁一向世間へ知ぬうち

に寧ろ嫁入して見せんと心を決し遂に此家の妻となりしが  
 夫弓之助殿は物堅き氣質なれば最趣きなく折に觸ては好た  
 殿御とて主水殿の事慕ひつれども馴染といふ物は又格別な  
 るものにていつか夫弓之助殿がいとしうなり頓てそなたを  
 設けしぞや其後町中にて主水殿と行あふ事ありしが其人も  
 妻を持つて愈謹慎深く昔の風情もせられず熟々思ふに其時主  
 水殿すげなくいはれたるが武人の信切にてあらずやそなた  
 は又阿蘇次郎とは友白髪の契を結びたるといふにも非ず宇  
 治にて見し迄の事と明石の浦の事をば夢にも知らねば彼人  
 はそなたの斯様に慕ふを知らず今にははや妻を迎へられしも



知れず鮑の片想とやらん徒に思ひ暮してあたら姿もうつる  
ひ果ん線言なれども駒澤は世に勝れたる人なりと父上の言  
越し玉ふ母も又恥をもあかす程の眞身を辨へ父母へ孝行に  
は早く其人を思切り機嫌能く駒澤へ嫁入してたべと種々に  
口説立られて深雪は此長物語聞ながら顔さへもあげず泣沈  
みて有けるが母の異見の骨身に染しが漸々に顔をあげ勿体  
なき不孝の罪は免させ給へ御言葉を諾ひ駒澤殿とやらんに  
嫁入して御慈悲深き父母の御心を休め参らせんと身の過失  
を悔みつる聲を幽かに詫申せば母の水青は深く悦び是はで  
かせり健氣なりと只管に譽はやしぬ斯て返事を認め幸ひの

便ありければ此趣きをいひ遣りけり鎌倉なる弓之助が宿に  
は媒人の斗ひにて駒澤方より申入越せし上今又妻が文届き  
て娘も異義なく承知したる趣きを知りて安堵し其悦び限り  
なし

第十三回

去程に深雪は一心金石よりも固く阿蘇次郎に約せし事を守  
り夫が爲に他家へ嫁づく心は露程もなく如何にもして此家  
を忍び出人情人に尋ね逢ばやど其折をぞ窺ひける是必竟前  
日母に得心の体に見せしは家内に油断をさせんとの心なり

當時の賢人と言ふ、駒澤に耻辱を與ふ事氣の毒なりと心を  
傷め様々思ひ回らせしが不圖一計を思ひ付我の面目を掩  
ん爲め一生に一度の戲言をいふべしと家の子供に固く口止  
して頓て使を遣し娘深雪事急病にて世を逝たりとて駒澤方  
へ申送りければ治郎左衛門は大きに愁ひ歎けども又詮術も  
あらざりければ遂に其縁談は止たれども尙駒澤を慕ふ輩ら  
は婦人不幸ありと聞て又追々縁談を言入る者多し然れ共次  
郎左衛門は深雪既に死去しうへは誓て後妻を娶るまじと深  
よく言放ち何れも固く断りけり扱も深雪は吹岡の屋敷を忍  
出東を指して走りけるがいつか萱の間にこへ若松の汀を

或夜深雪は一通の書置して間に紛れて通れ出都を指て走り  
けり戀の意氣地にあらずしていかで女の只一人道の旅に赴  
くべき水青は娘が書置を見るより人心地もなく周章て人を  
走らせ追駈させ祈禱よ占ひよと騒ぎ惑ひて狼狽れども到底  
歸り來らねば今は如何とも詮術なく泣々此由を認め鎌倉へ  
使を走せ弓之助に告知せしに弓之助の驚き一方ならず先年  
明石の船にての風情合點ゆかずと思ひしも畢竟是迄其吟味  
もなさで浮々油断せしこを悔しけれともだゆれども甲斐な  
し然はあれ今更駒澤へ對し何と言澤あるべき深雪めが不屈にて  
して一旦約せしに何條明白に申さるべき深雪めが不屈にて

も北に見て程なくくる木といふ所に到る爰迄は晝は隠れ朝  
夕の波のぐらき隙にたどりけるが追かくる者共は其顔だに  
も見ざりけり深雪は夜更て宿を出その驛のはづれより越方  
を見返れば五十斗りの男廿四五と思しき女を供し臙氣なれ  
ど親子とは知られけるが聲をかけておむすは獨旅と見ゆる  
が大神宮へ援参りせらるゝか我等は防州邊まで行くものな  
り旅は道連と申せば一緒に行べしと懇ろにいふに深雪は立  
留り見れば至極實體らしき野夫なれば如何にも妾は上方へ  
登る者夫なるはお娘御にて候か女同士は遠慮もあらずさあ  
らば道連に成給はらんと打連て行うちには彼の野夫が娘は世

馴たる氣はひしてうらなくも語らひける故深雪は大に安堵  
して行々てはや小倉の城下にいたり或る茶見世に腰打かけ  
爰時休らふに彼野夫深雪に私語さけるは是より先に文字が  
關とて旅人を改むる番所ありおむすは往來切手を持給ふか  
といへば深雪は俄に出て其設なしと答ふ野夫は是を聞き眉  
をよせて夫は氣の毒なる事かな切手なければ爰よりは水陸  
ともに通る事叶はずといふに深雪はほとく途方に昏れ黙  
してのみぞ居たりしが此老夫のいふ爰によさ仕方あり我等  
親子の切手に二人と記せり此二字の中へ一點を加へ三の  
字となし關守を欺き安々通し参らせんとて書加へ直に關の

戸に至り此切手を見せ何の苦もなく通りける斯て深雪は  
彼の老夫に從ひて隼人の瀬戸を渡り赤間が關へぞ着にける  
三人是より歩行路を経て急ぐ程に日ならず周防國小瀬川と  
言所に近着ぬ此所は凡そ百軒斗りの小村なり彼老夫深雪に  
向ひて此所は我在所なれば寛々我家に逗留して行たまへと  
て路傍の木蔭に深雪を立しめ此茅屋が我住居なりとて老夫  
は一足先に入り家婦に向ひて莞爾に耳もとへ口を寄せ極美  
い鳥を二羽しめたり一羽はもの成さうな物と私語き深雪  
を呼入て家の有様を見廻せば庭より手桶に湯を汲入て持來  
り上り口にて盥に移しお前達は嘸草臥玉はん洗足し玉は

奥へいて緩々くつろぎ休み玉へ深雪は家婦に向ひ是は慮外  
なり道すがらも御亭主の御世話になり侍るといふて草鞋脚  
半をはどくに皮肉腫れうきて喰入たる紐の跡さへ付たり連  
の女も俱にひとつ盥にて足を洗ひやをら盥所によじり上れ  
ば家婦は一間に誘ひ行き枕なごあてがひ盥茶を持來りて  
應しける深雪は素これ深窓に人となり萬初々しく何の心も  
付ずして彼等が心切を喜びける去ども連の女も家婦が娘に  
もあらぬ挨拶する故深く訝り怪みけり此女は小支那といふ  
て博多の柳町の遊女なり些の事より欠落して小倉の方に赴  
き彼老人に出逢しなり彼老夫實義の様に紛らせども素これ

れに漂よひ世の有様を見馴し故此家の主をば早くも人買と  
 は知侍る此家に入來る者は都て良らぬ者斗り符調とて彼等  
 が隠し言葉を聞に御身を高直に買んとの様子なり御身今地  
 獄へ落玉へば迎も浮び玉ふ事は成難し頓て賢渡され玉ひな  
 んあないたはしと涙に喜ければ深雪は是を聞よりも面色土  
 の如く霎時呆れて居たりしが涙ぐみて言るやうこは情ある  
 御言葉かな推量に遠はず子細有て夫を尋る一人旅切も主人  
 は人買にて有けるか然あれば今は籠の鳥雲井に歸らん由も  
 なし素より操を立ぬく妾が心故郷を出しより命は捨てなき  
 ものと觀念しつれば時に臨み死を見る事歸るが如き覺悟ぞ

畏をも拔る古狐の如き悪者ゆる所の者も後には其名を吉兵  
 衛とは呼す狐兵衛とぞ唱へける去れば此小支那は素より遊  
 女の事なれば手管には馴たるもの故初より吉兵衛を人買と  
 推しけれさも路銀さへ心に任せぬ折なれば態と欺されたる  
 振して能き目論見をなさんと知らぬ顔にて來りしなり小支  
 那は熱々と深雪が立振舞のたをやぎたるは極て良家の娘な  
 りと見て人買とも知らで至りしならんと家内の留守を窺ひ  
 深雪に私語くやう御身は只人にては在すまじ斯うら若き御  
 身に一人旅し玉ふは懸路に迫りての事とは疾より推し侍  
 る我身は素より往來の人にふまるゝかきの土うさ川竹の流

かし是見給へど懐るより取出したる九寸五分試みに扱放せ  
ば船々たる乃の光りは霜を欺く斗りなり小支那は覺えずぞ  
つとして流石は武家の御娘御深き御覺悟去乍ら死は易く生  
は難しと又一心は岩をも通すといふ左程切なる御戀時運は  
天道次第なり御命だにゐるならば何時かは其御人に邂逅給  
ふべし叶はぬ迄も艱苦を凌ぎ身を全ふして御尋ねあれ今日  
は主人は西隣にて人買仲間と車座にて酒盛してあれば今宵  
の内は逃れ給へ此家の後は蘆垣一重なり潜出給ふ程は妻  
切はとぎてしるしの白紙を付置なん夫を見當に忍出で走り  
給へど教へ又深雪が指の亂れなぞ直しければ深雪の悦び一

方ならずそもじの情の程はいつの世にかは忘るべきとて發  
に挿たる銀の簪振取りて小支那に與へ些の心付をぞ願しけ  
る斯て深雪は暮るゝを待てぞ居たりけり神無月の大方時雨  
勝なるに今日も時雨ていこと物哀に見えにけり深雪はひと  
り柱にもたれ居たりしが入相の鐘鳴渡りはや黄昏の景色な  
れば心細さも彌増して雲井をわたる鴈の翼に羨ましくぞ思  
はるゝ此時雨は降來り浦風は吹募るにぞ物凄じき事いふば  
かりなし頓て家婦は燈を點し向ふより風呂に呼れて出行ぬ  
れば小支那は深雪を勵ましいざ此隙に逃給へと急はしく引  
立るにぞ深雪は徐ろに喜び其儘裏手に忍行き白紙の枝折を

見るに天の奥と潜り出堤傳ひに走らんとするに一天墨を流  
 すが如く東西をさへ辨へず足元は葦原にて唯一筋の細路な  
 り深雪は杖の料に垣の竹を扱きたるを地に跪づき天神  
 を祈りて此竹杖の倒れし方を東とし給へと杖の倒れし方へ  
 足に任せて只管走るに葦の刈株にて足に疵つけ鮮血流れて  
 痛堪難かり後を見返れば數多の松明振照し罵り騒ぎて走り  
 來るはわれを追來る者ならんと思へば肝魂も身に付ず猶只  
 管に走れども素よりかよわき女の足追手は次第に近付ぬ一  
 籠の藪の透間より洩出る月影にすかし見れば近傍はあらは  
 なる冬木立にて大きな石佛のあるのみにて身を隠すべき

處もなく進退爰に極りぬれば死すべき時に死ざれば死にま  
 さる耻ありと懐中なる短刀を取出すんとするに何時の間  
 かは取落してありければ然らば此池に身を沈めんと水の深  
 みを尋ぬれと音さへ足らぬ淺淵にさらば縊れて死すべしと  
 幸ひと江に望みたる柳の垂枝に畏をつくり襟を合せあは  
 や岸より飛下んと南無と一聲叫びしとき十夜参りと見え小  
 提灯を持珠數爪繰り南無阿彌陀佛と唱へ來りし老人深雪が  
 南無の一聲を聞付け正しく首縊と見るより矢庭に飛懸つて  
 抱き止め月の光に照し見れば十七八の手弱女の年ふる柳の  
 許に在て両手を合せあはや縊れんとせし所なれば彼人種々

深雪をなだめ様子を見て己が所もあかし見殺しにするは儻  
 まし些の物入は後生の爲に此老人が御扶け申さんと懇切に  
 いたはるうち早や追手の者は駆來り大事の代物を棒にふら  
 んとせしとて直に引立て行んとせしを彼人種々に扱ひ懐ろ  
 の財布より金子を取出し彼吉兵衛にとらせ追手の者にも與  
 へ漸々事を濟し深雪を連れ歸り船頭を呼起し子細あれば早く  
 船を出せと急立れば碇引あげ漕出す深雪は人買の手を遁れ  
 念佛者の功德を喜び恰も地獄で佛に逢し心地せり折柄順風  
 吹出ければ順て帆を揚げ只一夜の内には播磨の室の津にぞ着  
 にける此老人といふは室の津の色里にて數多の遊女を抱へ

置茶屋の亭主なり名を吉兵衛といふ此吉兵衛は生れ付片付  
 なる故眇の吉兵衛と異名せり常に田舎渡世して子をも買ひ  
 出しが防州の小瀬川はせげんの古巢なればとて疾より此所  
 に來り居て其代物を懸索せしに此頃鼠ぬけの狐兵衛が二人  
 の女を連れ來りし故竊に窺ひ直ふみに懸りしが此道にするを  
 き眇吉は年増は望まず手入すの深雪を望むに狐兵衛深雪が身  
 の代を五十兩よりは負じと言張れども眇吉中々合點せずも  
 とこれよし有欠落者なり強て苦界に沈めんとせば自害もし  
 かねず然すれば資本の損となりと此掛合に枝葉つきて既  
 に破談にもなるべきを肝煎ども色々に扱ひしが畏ぬけが藝



々は晝小支那と深雪が私語あひし事を立聞し直に両吉が論  
 の座に走り行て様子告げるに鬼をも欺く眇の吉是に付込  
 み三十兩に買落し扱伴の狂言を書き態と拵へ事して空念佛  
 を唱へてしかせしなり素此眇吉は夫あり子ある中をさへ買  
 取り種々悪計を廻らし如何なる女にても苦界に陥るゝの老  
 賊なれば斯る作り事して深雪が必死を救ひ恩を著せ義理に  
 つめて苦界へ沈めんと巧みしものなり深雪は斯とは夢にも  
 知らず世には慈悲善根の種を蒔く後生願も有ものかと思ひ  
 の外彼が家の体を見れば實に悪所と思しくて敵多の傾城共  
 聲を献じ笑ふ故遊客入集ひて最賑はし深雪は見るより胸潰

れ身の不仕合を歎き幾度となく死路を求めしか左に右に  
 小支那が戒を守り生は難しと思ひ差込つかへを押へける眇  
 吉は妻のお六と圖り何か遣手に私語けばやりては吞込み深  
 雪に向ひ主が其死を助け多くの金を費せし恩義の程を口説  
 き夫を償ふ爲に半年が一年斗りもつとめに出られよ幸ひ金  
 持の年寄客に水揚の事を約せし事迄語り種々すかしけれど  
 も深雪は更に聞入れずして言るやう夫は心得ぬ事かな一命  
 を助けられたるは慈悲ある人の意とこそ思ひつれさる事は  
 聞さへ耳も穢なりとて取合ふけしきも有らざりけり

第十四回

去ば遣手は深雪が情の強きを惜み座を立て主人に此よしを告ければ吉兵衛大に怒り我若干の金子を費し買取り來りしは全く金箱にせんためなり聞ぬとて其儘に濟さうかと遣手を叱りそれ早くきやつを赤裸にし思ふさま小刀針を立よ杯といふを妻のお六は夫の裾にすがり必ずしもはやまり玉ふなまづく 雲時待玉へ彼娘は歴々の育と見ゆるをあながちにし玉は舌噛切ても死兼まじき様子なり然ある時は損に損を重ねぬる道理先い一度説諭玉へと漸々宥て己が居間へ

深雪を呼寄せ見れば見る程其さまやさしく心恥かしきけはひぞしたりお六いふやう和女は今三十兩余の身の價となり玉へば夫を償ふ金のあらずは暫時苦界の勤めし玉はでは叶ふまじ然るを何とも思はでありけるこそ心得ぬ遣手どもは鬼々しきものにて今和女に愛目を見せんと犇くを漸く止めしがおぬしは如何なる人にてあるやと物やはらかに問ければ深雪答へていふ様妾はよしある者の娘なり譯ありて只一人夫を尋ねて登るもの其人には未だ枕はかはさねと一度約せし上は水火を踏とも添遂んと思ひ悟れば如何に責給ふとも氷雪より潔白さ此身を何ぞ汚すべき寧ろ先の夜盜れ死な

ば斯る憂蠅き事は聞まじきには是の主の費のみ一ツの心残り  
 なりおまへ若佛心あらば何卒主人の氣色を宥められ免えて  
 都へ登せて給へ尋る夫に會しうへは金は返し申さんさもあ  
 らば折角今瀬川の入江にて必死を救ひ給はりし功德も水に  
 成りなまじ主人の厚き情をばいかで生涯忘れんと涙と共に  
 播口説きければ流石はお六深雪が貞女を感せしうへ其言事  
 道理なれば心よく承引て如何にもおぬしの心の中いたはし  
 くこそ思ひ侍れ我々斯るさもしき營業はなせどもまんざら  
 人でなしにも候はず夫の手前はよきに執成候はんと猶懇切  
 に打語らふお六は深雪が立たる跡にて吉兵衛と差向ひ色々

利解をとき深雪が心意氣を語り彼娘は氣情のはげしき者に  
 て一心戀に凝まりて石にも成兼まじき貞女なれば強て追ら  
 ば死を早むるといふものなり周防のせけんをとらへて如何  
 に立引すとも此方にも後ろ暗き事もあればあらだちて事は  
 なりがたく彼娘は極めて歴々の娘ならん事を籠を明けて放  
 ち遣り尋る人に逢せなば金子は定めて返さるべしよし又万  
 に一ツ間違ひたる時は私が四季のさう佛をせまい程に茲は  
 一ばん私を立て免して遣しやれといふに眇吉は素此事に熱  
 せし名ある粹坊なれば小瀬川にて十夜戻りの狂言をなせし  
 人を誑す狐畏もむだ事とは成りたれども迎も此手でゆかぬ

奴ももし迫り殺しては何にもならぬ事あれば夫も至極の了簡  
 也と一決して深雪を放し遣るに如じと心を枉げて菩薩頭夫  
 婦侶俱さまくにもてなし幸ひ好き便船あるを聞出し船頭  
 も知人にて慥なる者なれば是を頼みて深雪を浪花へ送り遣  
 らんと萬事信くしく取賄ひぬ却説く宮城阿蘇次郎は故あ  
 りて駒澤の家督を継ぎ次郎左衛門と改めたるに秋月が妻水  
 青は勿論しかありしとは夢にも知らぬ深雪は船に乗り移り  
 夜もすがら寝もやらず名たる播磨灘は五十里の大洋なる  
 に頭しも秋すぎ風烈しく往先は鳴戸のさし沙巻出て波は山  
 の如く起り船を揺上げゆり下しつ夫に深雪は端然として顔

色も變らで有けるうち高砂の浦も跡にし明石の瀬戸を過ぎ  
 又越方のしのばれて彌々其人の懐しく稍都の空の近づきけ  
 るぞ樂しき猶も水を送り山を迎へて浪花の濤へぞ着にける  
 斯て深雪は浪花を立出で難なく都へ辿りつきて嬉しさの餘  
 り旅の勞れも厭はず町所は知らずして只宮城阿蘇次郎が宿  
 と雲をつかむやうに尋ね索せども速かにしるべくもなけれ  
 ば日の暮たるに是非もなく本斗町の旅店に宿りぬ素より路  
 金の用意もあらざる故有程の身の廻りを賣なして日々の遣  
 ひとし何れ阿蘇次郎に逢さへすれば如何ともならんと遂に  
 悉く賣盡せしぞ是非もなし漸くにして住所を下河原にて尋

ねあてしかを今は在らぬ様子故隣りの多葉粉屋にて問ひけ  
るに成程隣家に宮城さんとして學問の師匠をなす人の在せし  
が何事の有けん俄に國へ下られたり其後は鎌倉に住み今は  
名高き人に成て在せるよし或人より傳へ聞しと聞て深雪は  
あつと叫びて倒れふし暫時氣も付ざりければ是を見るより  
向ふ隣りより人数多集まりて顔に水打坏しければ漸くに蘇  
生りぬ人々烟草屋より其様子を聞て哀を催はし種々にいた  
はりて扱は宮城氏に由縁の人なるを宮城氏鎌倉に在すよし  
は聞侍りぬ左もあらば鎌倉へ下り給ひて對面あれ鎌倉とい  
へば遙なる様なれども道中僅に十日餘りとぞいふなり左ば

かり心弱くしては一人旅の程覺束なし氣を體に持玉へと最  
懇切にいたはりける何地の浦にも鬼はなけれをわけて都は  
人の心もやさしく彼の海道を行ば日の間の暇なり夫より山  
科といふところを経て大津といふ驛あり今日は未だ日も高  
ければ大津迄は行かるべしなんぞと問ぬ事まで言けるに深  
雪は都人の心切なるを喜び頓て杖に扶けられてあけの坂を  
たどり姥がふところを過行て程なく大坂山にぞ着にけり此  
處よりは湖水も少し見えて凄じげなり深雪は熱々思ふやう  
是より先の東路は猶遙なるに何時か衣類も盡し身に添ふ  
ものも最薄ければ此頃の寒氣肌を胃し心地また例ならず然

れども愛までの道すがらは京へさへ着たれば戀人に會るゝ  
事と是をのみ樂しみて幾千の艱苦をなせしに其人今はあら  
ずして床の空に在すと聞殆ど精力を落し行つ戻りつ獨り猶  
豫ふ邊には關の清水も落葉に埋もれ神の檜垣にはふ葛も色  
變りせし霜枯に折節入日の影残る向ふの山より北風吹おる  
して薄着の骨身に冷通れば惣身に粟粒おこりて慄へおのゝ  
さけるにぞ斯俄に寒邪に胃され息困しさいふばかりなく今  
は一步も進む事能はず此一夜泣明しけるが曉方の風少し落  
て時雨のやうに降出るにまた一層の愁ひを増し泣々宮居の  
下まで行きて虫の息もつきあへずありけるが此朝驛の名主

等用あつて通り過しが爰に倒れし人の泣聲草葉によはる虫  
の音にまがへるを聞付て立止り見れば乙女のやつれ果て身  
には一枚の襪を纏ひ最墓なげなる有様なるに深く哀れを  
催し連の者どもに語らひ此病女は斯やつしく成たれど  
爪はづれの賤じからぬはいかさまよし有人の果ならん扱も  
いたましき事にあらすやと紙入より丸薬を取り出し吞すれば  
里人どもは熱き白粥なと與へ名主は又里人に申付此所にあ  
やしの小屋をしつらはせ蕪の莖を敷き稻巻なとして臥たる  
上を掩ひ聊か寒氣を凌せける往來の人も是を憐み一錢二錢  
を投與へて過ぎけるとかや深雪は阿蘇次郎を慕ふあまり晝

夜こがれて泣程に途に両眼泣潰れ今は蟬丸の因果を引俄に  
盲目となり果老は哀れといふもおろかなり然るに一心の病  
毒目の中に凝りかたまり半月斗にして身は壯健になりけれ  
と他國にさすらへ剩へ膝入るばかりの小屋に起臥するなれ  
ばいふせき事何に譬へん様もなし由縁の方よりとて言問ひ  
おこす人もなく故郷の記念とては空行月日のみなりしを夫  
さへ今は拜まれぬ盲目の身の悲しさは夜なれどもぬば玉の  
開路を迷ふわびしさに松風と谷の流れの響のみ耳に聞えて  
東なる人のみ思ふて居たりける或日また名主も来りて深  
雪に向ひ言るやう先日惱深かりしとき熱にうかされうはこ

とに早く鎌倉へ下りて我夫に逢たしと幾度か言はれたり夫  
は真心に候やと問ければ深雪は答へて聲かき盛り如何にも  
我夫は東の空にと聞かからに尋ね逢んと走り来てあら耻しや  
病に罹りて此道へ倒れふし幸なくも亦目の視えぬ身と成果  
ぬ然あれども命の限りは神佛の恵を頼み邂逅はんと思ひ侍  
る若此儘に死果なば幽魂と成ても下らては置すと云ふに名  
主いふやう然あらば其所には何ぞ覺えられたる藝はあらず  
や深雪は聞て打點頭わらはは三味線を引侍と云ければ名主  
は己が心に協へる思持にて宜々三味線を引れれば鎌倉  
へ下るには能き便なりとて夫より驛中を廻り五文七文づゝ

み

集り頼て二貫計になりければ名主は此錢をもつて一挺の三  
味線を求めて深雪に與へいざ是を彈て何なりとも小唄をう  
たいそれをもて路費として段々に鎌倉へ下られよと最深切  
に教ける此名主も亦得難き奇特者にぞありける深雪は其情  
を深く喜び然らば此三味線を彈て東海道に下らんと熟々お  
もうにわれ今盲目となりたれば戀人に會とも極めて夫とも  
見認給はずさあらば朝顔の唄をうとふに如じと袖ををいろ  
にしづみたる露のひぬ間の朝顔の姿める斗りやつれてし髪  
身を照らす日影さへ見る由もなき耻かしき泪まぎらせ春雨  
のはらくと調べる三味線もいとほしと妻戀ふ鹿の啼音よ

り哀れ合める聲音には聞人殊に感に堪へ霞に向ふ鶯が迦陵  
頻伽にも劣らじと言騒ぐ程にもてはやされ恵の花の敷そい  
て今は幾々なれども新らしき布子を重ねて餘寒を凌ぐ姿と  
なりける斯て深雪が行先々の里人どもは深雪といへる名を  
知らねば只朝顔と云嘘す程に只これ朝顔の替と呼なし  
て街道筋に其名高くぞ聞えける深雪が行ける宿々は朝顔の  
唄大に流行て犬打童はさらなり干菜ささむ飯盛も鬼殺しの  
雲助まで此唄を歌つる事晝夜の別ちなく宿々は是が爲め姦し  
かりけるとかや



第十五回

扱また爰に大内介多々羅満興殿は此春幕府の御暇を賜はり  
 本國周防の山口へ下らるゝに寵臣駒澤次郎左衛門御先供な  
 るに依て番頭岩代瀧太同道にて殿より三日先に鎌倉を立出  
 ける行ば程なく業平の中將が鹿の子班とよませ給ひし富士  
 の裾なる駿河の府中にぞ着にける駒澤今は家老格なれば其  
 行列いと美々しく本陣には駒澤が定紋の幕を張り關札高や  
 かに建置玄關前には砂子高く盛あけ其邊水打そゝぎ亭主は  
 麻上下にて恭しく出迎ひ次郎左衛門座敷に通り頓て亭主に

目録をとらせ杯して風呂に入り暫く湯氣をさましめてあ  
 りを見るに最あやしき小屏風に至極見事なる色紙を張交  
 てありけるを讀下せば己れが字治の笠狩の船にて深雪が扇  
 子に書て遣りたる朝顔の唱歌にて有ければ駒澤深く不審し  
 み彼舟に伴ひし者ならで知る由もなき此唱歌誰が水莖の跡  
 かは知らねと爰にて見んとは兎に角に心濟さればと手を打  
 ち下女を呼寄せ彼色紙を指し是は何人の書たるか其方は知  
 らすやと問ひければ下女答て此屏風は近頃出来いたせしに  
 て夫なる文字は朝顔の流行唄なるべし爰に子達の師匠より  
 書て呉しと主人に譯を承はりぬ鎌倉には未だ朝顔の唄はや

り申さずやこゝらの宿々は頻に此唄をもてはやし侍るにと  
いふ駒澤眉を翠めそは又如何なる故に流行いたせしぞと怪  
みけるに女いふやうされば其事は近頃朝顔といふ七八計  
の美しき誓の東に尋る人の有とて上方より下り來り其朝顔  
の唄を三味綿にかけていと面白くうたい侍る初は非人の如  
き風情なりしが今は其藝の蔭にてあちこちにてもてはやさ  
れ稍時めき猶此宿に止められて居侍る殿にも召れて聞せ給  
はし呼申んと勸めける次郎左衛門は聞より胸騒ぎ何となく  
心に答へけん然らば早く聞まはしと同宿の瀧太に向ひて是  
をはかるに瀧太も一段の事と言けるにぞ女に言付いそぎ其

誓を招き來らしめて薄縁の上に座らしむ盲女はみそぼらし  
げに低頭して禮をなすを駒澤燭臺の影にて只一目見て最  
きし体なるが誓は調子を合せつゝ聞賓人は家夫と神ならぬ  
身の知る由もなくあやとりそむる憂身にも出が知すといふ  
ものならん只何となく打萎れ自からなる涙聲にて  
露のひぬまの朝顔を照す日かげのつれなきに  
あはれひと村雨のはらくと降れかし  
とおし返し物悲しくもひき唄ふ夫の春雄は忍び目に見  
れば見る程疑ひなき我妻なればいたはしや世に無き人と思  
ひしが斯くやつれて存命ありしか見し其時は花やかになま

めきつるが今は萎める朝顔の露をおびたる憂あり我深く思  
 ひ測らで元の名を告さりしは過なれ我爲に操を立て家を逃  
 れて此處へ來り盲目と迄なりたるは哀慕につれたる業にや  
 あらん可愛の妹が心根やと骨身に答ふる悲しさに耐兼てこ  
 ぼす泪は泉の如く聲を呑込み泣顔を岩代に見られしと扇子  
 を押當てそむくれば座にゐる人も鼻打かみて黙し居たり瀧  
 太は一人強氣の者替の方を見流してうたひやうの上手伊勢  
 の海むしろ田よりは今めきて面白かりき今一曲と望みける  
 を次郎左衛門押し止め纏頭を與て退せける瀧太は最不興氣に  
 思ひけれども駒澤は先づ方より胸打潰れて悲歎のあまり再

び聞に忍び兼て瀧太を止めしなり駒澤は夜更て人の静まる  
 を待て先の下女を招き子細あれば又も彼の朝顔とやらんを  
 呼寄せ吳よと頼みければ心得て人を走らせけるに使歸りて  
 申やう朝顔は先程清水といふ在所の家に呼れ駕籠に乗りて  
 参りたれば今宵は彼所に泊るならんと由を聞次郎左衛門  
 深く望を失ひ人知れぬ歎き煩ひしが七ツ立の事なれば今宵  
 は朝顔に逢ふ事の協はじと瀧太が手前なかりせば仕様もあ  
 らんど思へども今は何共詮術なく常に肌身を放さざりし妹  
 が紀念の扇を取出し亭主を呼べと譯あれば此扇を宵の替に  
 届て吳よとまた別に一包の金子を添吳々頼みて渡しければ

朝顔の繪に露のひぬまが書てあると聞より朝顔覺えずはつ  
 と大息吻に主は扇を返し視て朝顔にもまた何か書てあると  
 朝顔彌々周章てにじり寄ば亭主は扇を打見やり宮城阿蘇次  
 郎事駒澤次郎左衛門と讀下せば扱は駒澤殿はもと宮城と申  
 せし人なるかと言も果ぬに朝顔は呆れまどい思はず其處に  
 伏し轉び人目も耻す取亂し身は空蟬のもぬけの如く何阿蘇  
 次郎殿が駒澤次郎左衛門とや夫こそ我夫なれ南無三寶運か  
 りしいで此上は片時も早く追付んと足もそらに駈出すを主  
 人は引留めて其様にいらち給ふな餘りに遽然急がれなば怪  
 我もやすらん駒澤殿は七ツの立の事なれば迎も急には追付

亭主は是を受取りて二方の客をおくり未だ夜は明ぬとも又  
 しも朝顔が宿に使を遣り頓て連歸らせんとせしが朝顔は何  
 かと隙をりて己の下刻に漸々來り亭主に昨日の禮を速朝か  
 ら呼給ふは何事に候といふにぞ亭主ゆふやう別の事にもあ  
 らず宵のお客の御頼にて是を和女に遣はし吳よと扇子と此  
 金を殘し置れたりと其儘渡しければ朝顔は眉を顰めこは不  
 審し故なき御方より斯重氣なる金給ふべきと扇をひねりま  
 はしてありけるが遽然しく旦那此扇を見て給はれ若や朝顔  
 を書き其傍に妾が常にうたふ唄は書てはあらざるやと云ふ  
 に主人は目鏡を掛け其扇を開き見て成程云るゝ如く一輪の